

紅梅文庫旧蔵本 桐壺卷表紙（縦 18.0 × 横 18.4 糎）



つまは乃湯時母り女湯更衣あまふ  
 い行方まりふいとをじこもふて  
 是母はあめとく礼をこもめはは  
 わりえりけりりよまをこもめは  
 ありはふはわこくめはちかふは  
 としめり福と流に形ははとされり  
 下はうれ更をりりあうこをすう  
 もあこゆらひやほく魚つちて人  
 忠公とうこまううふはははは  
 やありえんいと阿はくありゆき物

紅梅文庫旧蔵本「桐壺」冒頭

## 紅梅文庫旧蔵本源氏物語(写本五十二帖)について ——いま、なぜ、紅梅文庫本なのか(付、桐壺・箒木影印)——

上野 英子

紅梅文庫旧蔵源氏物語(以下、紅梅文庫本と略)は、三条西実隆最初の手沢本だった(文明本)の転写本の流れをくむ写本である。たかだか室町後期に書写された、しかも転写本にすぎない一本に対して、どうして「いま、なぜ、紅梅文庫本なのか」などといった大仰な問いかけをしているのか。以下、次の三つの事柄を説明していくことでその理由を明らかにしたい。

- (一) 実隆最初の手沢本である(文明本)について
- (二) 紅梅文庫本がその転写本の流れをくむことについて
- (三) かかる紅梅文庫本を通じて新たにみえてくるものについて

とはいうものの、(一)については拙稿「三条西家源氏学における本文形成史(一)」(平成二十八年三月、実践女子大学学芸資料研究所「年報」三十五号所収)で、(二)及び(三)の一部については拙稿「ふたつの定家本源氏物語と三条西家本——付、実隆文明本の転写本としての紅梅文庫旧蔵本紹介——」(平成二十九年三月、同「年報」三十六号所収)で、そ

それぞれ発表してきたことでもある。

よって本稿では、既に紹介済みの部分については要点と若干の補足・訂正を加えるにとどめ、紅梅文庫本の本文上の特色について今回新たに判明した点を追加報告し、影印の一部を紹介することにした。

## (一) 文明本

三条西実隆の日記『実隆公記』（以下、『公記』と略）は、彼が二十歳を迎えた文明六年（一四七〇）元日の出仕記事から始まっている。およそ十年にわたって練り広げられ都を灰燼と化した応仁の乱が、ようやく終熄へと向かっていた時期である。一方朝廷では、戦禍で壊滅的な打撃を受けた禁裏御文庫の復旧を果たすべく、いわゆる文明年間の〈古典籍復旧運動〉を始めていた時期でもあった。この運動には、鞍馬の疎開先を引きあげて帰洛し、侍従として出仕し始めた実隆もまた精力的に参加していたようで、『公記』を読んでいくと、公武からの依頼による古典の書写・校合・加點等の記事が目立つ。井上宗雄氏が説くように、実隆古典学の基礎はこうした運動から形成されていったものと思われ、<sup>注1</sup>三条西家の源氏学もまた応仁の乱の焼け跡のなかから生まれたといっても過言ではないようである。

さて、『公記』でみる限り、実隆は生涯にわたって少なくとも四度、自身の手沢本となる源氏写本を作成していた。これら四本をそれぞれの完成年次から〈文明本〉〈永正本〉〈大永本〉〈享禄本〉と仮称するならば、最後の〈享禄本〉が現行の日本大学総合図書館蔵三条西家証本源氏物語（以下、日大本と略）である。なぜ四度も手沢本を作ったのかといえば、〈享禄本〉以外の三本は皆、経済上の理由から売却せざるを得なかったからである。実隆が仕えた後柏原天皇でさえ、資金不足から、踐祚後、実に二十二年目にしてようやく即位の礼を挙げられたことを考えると、公家たちにとつ

ては非常に厳しい時代だったといえるだろう。そのなかにあつて実隆は、売却しても直ぐにまた新たな五十四帖をつくり始めたのである。その執着心には刮目すべきものがある。

実隆が初めて自身の手沢本となる源氏物語写本を完成させたのは、文明十七年(一四八五)実隆三十一歳の時であった。同年閏三月二十一日の日記の記事によれば、

源氏物語五十四帖書写功、今日終之。周備千万、自愛者也。及晩宗祇・肖柏等來。歌道清談頗有其興。注3

とある。そしてこの(文明本)を手放したのが永正三年(一五〇六)八月二十二日のことで、当日の記事に、

抑源氏物語愚本(二筆書之、銘後成恩寺禪閣筆)随分雖秘藏之本、甲斐国某所望、黄金五枚(代千五百疋)出之乞取之間遣之。則又源氏本(七帖不足)召置之。値四百五十疋也。兩条共玄清法師媒介也。

とある。これによれば(文明本)は実隆が全冊一人で書写したもので、「後成恩寺禪閣」(一条兼良)の銘が付いていたようである。また(文明本)売却金の一部で、二番目の手沢本となった(永正本)の中核となる四十七帖を購入していたことも判る。

この完成から売却まで、実に二十一年もの長きにわたって、実隆は(文明本)を用いていたことになるのだが、その間における彼の源氏物語関連事績は、およそ以下のようなものだったと思われる。

(イ)講釈受講時に自身のテキストとして利用したろうこと

〔文明本〕成立の一週間後、実隆は宗祇や肖柏を自宅に招き、彼らの源氏講釈を受講した。文明十七年閏三月二十八日から翌年六月十八日まで続き、実隆にとっては源氏研究の基礎となった講釈である。期間中、宗祇や肖柏はそれぞれの源氏本を持参して講義に臨み、実隆もまた自身の〔文明本〕を以て受講していただろうから、この講釈を通じて〔文明本〕が彼らの本文と交差する機会もあつたろうと思われる。

(口)「青表紙正本箒木」との校合を加えたるうこと

文明十九年三月三十日、実隆は宗祇の持参した「青表紙正本箒木卷」を閲覧し、翌日に校合した。校合結果は当然、自身の手沢本だった〔文明本〕に書き入れたものと思われる。

(ハ)宮中での源氏講読を担当した時に持参し、読み上げたろうこと

延徳二年(一四九〇)正月から翌年十月まで、実隆は勅命をうけて宮中で源氏講読を行った。初回到先立ち、実隆は自邸に宗祇を招いて予行演習を行っている。宮中では〔文明本〕を持参して読んだものと思われる。

(ニ)系図や注釈書など源氏物語研究の際の依拠本文としたらうこと

実隆がまとめた『源氏物語系図』四種のうち、長享二年本・明応八年本・文亀四年本の三種は〔文明本〕時代の編集である。また肖柏の聞書をもとに第一次『弄花抄』(散逸)を編集していた期間も同様である。いずれも〔文明本〕を依拠本文としていたものと思われる。

(ホ)転写本の作成を許可したこと

寄合書きへの参加など、実隆に源氏写本の作成依頼は多かつた。なかには実隆が自身の〔文明本〕を転写して送ったり、あるいは〔文明本〕を転写するため一部貸出しを許したこともあつたようだが、少なくとも次に挙げる二本は全冊転写していたことが明かである。

・明応四年(一四九五)六月、「竹園上藤局本」が完成

・明応五年六月～明応六年正月、「姉小路本」の作成

このうち、「竹園上臈局本」を写したのが本稿で言う紅梅文庫本である。一方『公記』の記事によれば、「姉小路本」の一部は、最後の手沢本となった(享禄本)作成時に借用し、完成後に返却したようである。<sup>注4</sup>

(一) 紅梅文庫本

書名は該書に押された前田善子氏の蔵書印による。該書は室町後期の写本(五十二帖。蓬生・若菜上欠、総角は元禄十三年の補写)で、夢浮橋卷末に

本云

此物語五十四帖以侍従大納言実一卿

自筆本上臈局(法雲院/左大臣女)手自被書

写者也深秘不可遣他所而已

明応四年六月一日

李部王判

という本奥書がある。明応四年(一四九五)六月一日に記された「李部王」(伏見宮第五代当主邦高親王)によるもので、これによれば伏見宮家の「上臈局」が「侍従大納言実一卿」(三条西実隆)の自筆本を手づから書写した五十四帖だとい

う。「上臈局」とは、割注に「法雲院、左大臣女」とあるので今出川教季女のこと。教季女は伏見宮家に「上臈」という女房名で仕え、邦高親王の子（のちに第六代当主となった貞敦親王）を出産したので、局を賜り「上臈局」と呼ばれたのだろう。一方、『公記』にはこれに呼応する記事として、邦高親王奥書の日付より六日遅れの二十八日条に

伏見殿上臈源氏本五十四帖銘、今日染筆。（明応四年六月二十八日条）

として、実隆が伏見宮家の「上臈源氏本五十四帖」のために「銘」を記したとある。伏見宮家では実隆自筆本を書写してようやく完成した写本だけに、実隆にもその旨を記す文章の揮毫等を依頼したか、あるいは題簽の揮字等を依頼したものと思われる。<sup>注6</sup>

この、明応四年当時の実隆手沢本といえ、彼が全冊一人で書写していた〈文明本〉ということになる。延徳年間に、実隆が〈文明本〉を持参して宮中で源氏講読を行っていたことなどもあって、〈文明本〉に関心が寄せられたのだろう。伏見宮家における転写本づくりもその延長線上の出来事かと思われる。

但し紅梅文庫本の場合、肩付きに「本云」とあることから、〈文明本〉を写した上臈局本そのものではなく、上臈局本の転写本ということになる。とはいえ、紅梅文庫本の書写年代は室町後期であって、近世までは下らないのではないかと思われる。何となれば総角巻一帖だけが近世（元禄十三年）の補写本なのだが、この総角と比較すると他の諸帖は、表紙・綴糸・本文料紙いずれも、少し古びているからである。紅梅文庫本は（六八半本）の列帖装。片面行数（十行）も和歌の書き方も統一されており、後遊紙の枚数にも無駄が無い。おそらく紙型や片面行数などは底本の書式通りに書写したのでらう。その書影をみるに、補写本以外は全冊丁寧な女筆のようである。伏見宮家で作られた、上臈局本の複



本だった可能性も考えられる。

ことほどさように、伏見宮家には〈文明本〉を転写した「上藤局本」が存在していたが、それと関連して、『公記』には〈文明本〉を売却した後の実隆が、伏見宮家から源氏本を借用し書写したという記事が散見する。例えば次の通り。

永正九年(一五二二)

六月十二日 伏見殿南御方、源氏本申出之。十帖給了。

六月十三日 源氏今日立筆。

右に挙げたのは実隆にとっては二度目の手沢本となった〈永正本〉時代の記事である。永正九年に私に施した傍線部「伏見殿南御方」に源氏本を申し出て、十帖ほど借りて翌日から書写を開始したとある。そして『公記』には更に、

永正十七年(一五二〇)

三月十七日 源氏料紙且到来。則申出伏見殿南御方本、今日帚木卷書始了。

三月十九日 源氏物語、帥、西室今日書始之。

三月二十一日 召良椿、料紙事等申付之。

四月三日 源氏料紙到来。

四月六日 桐壺卷立筆。

四月十七日 源氏本返進伏見殿。又申請之。

大永元年(一五二二)

十月十一日 今日源氏表紙事申付、百疋遣之。

十月十六日 源氏本悉出現、自愛く。

十月二十二日 召大工令作源氏箱(↓二十三日 箱完成)

十二月二日 源氏箱、外居等令塗之。

とある。こちらは〈永正本〉を売却後、三度目の手沢本となった〈大永本〉が完成するまでの経緯を抜粋したものである。永正十七年三月十七日条に「源氏料紙到来」とあるのは、新たな手沢本を作成するための「源氏料紙」が到着したという意味。興味深いことに、この時も実隆が例の「伏見殿南御方本」を借用し、しかも箒木から書写している。箒木巻を写し終えたのは四月六日だったようで、引き続き桐壺を立筆。書写には「帥」(公条)や「西室」(公順)も加わり、十一日後には伏見殿に源氏本を返却し、さらに「又申請之」とある。全冊か否かは不明だが〈大永本〉に「伏見殿南御方本」が関係していたことは確実だろう。

こうして出来た〈大永本〉も享祿二年(一五二九)八月に売却してしまうのだが、実隆は最後の手沢本となった〈享祿本〉を作成する時にもまた、桐壺・箒木・空蟬の底本に、大永五年(一五二五)に公条が〈大永本〉を転写した写本を用いていたのであった。〈享祿本〉すなわち現行の日大本に、それぞれ次のような本奥書が記されているからである。<sup>註</sup>

大永五年六月二十七日 書写之(日本桐壺卷・本奥書)

大永五年八月二日 書写了(同籀木卷・本奥書)

大永五年八月七日 終日書之(同空蟬卷・本奥書)

では伏見宮家の「南御方本」とさきの「上臈局本」とは同じ写本なのだろうか。そもそも両者は同一人物なのだろうか。当初稿者は、大永五年(一五二五)の時点になると実隆が三条実香女をして「上臈局」と呼んでいること、更に所生の貞敦親王が新当主となったことから、教季女は上臈局から南御方と呼ばれるようになったのではないかと考えていた。しかし父邦高親王の出家が永正十三年(一五二六)だったにもかかわらず、実隆はそれ以前から「南御方」の源氏本を借用している。両者は別人とみた方がよいかもしれない。

とはいえ、実隆が伏見宮家の本を少なくとも二度に亘って借用・転写していたこと、〈大永本〉〈享祿本〉の少なくともその一部には、伏見宮家の本が取り込まれたらしいことは確実である。実隆がここまで同家の本文に執着したのは、思うに、〈文明本〉の転写本だったからではあるまいか。伏見宮家において今出川教季女の書写した源氏本(上臈局本)が南御方に譲渡されたのか、あるいは南御方の許で上臈局本が転写されたのかは不明だが、〈文明本〉売却後の実隆が、終始伏見宮家の源氏本に執着していたことは確実に窺えるのである。

なお池田亀鑑氏は『源氏物語大成 卷七 研究資料篇』<sup>注</sup>のなかで、紅梅文庫本と同じ奥書を有するところの一本を「日高氏蔵の古写本」と呼び、次のように言及された。

右日高氏藏本によれば、実隆の書写した本があり、その本文はなほ純粹な青表紙本の特性を伝えてゐたが、公条の書写した現存の三条西家本には既に河内本との混成が生じてゐる。(七八頁)

「日高氏藏の古写本」については、私に施した傍線部「なほ純粹な青表紙本の特性を伝えていた」と評価しながら、なぜか説明はこれだけで写真の掲載も無く、池田氏の筆はすぐ「三条西家本」(日大本)へと移っている。何らかの事情で、満足に調査できなかったからか。それとも氏の関心は三条西家本から大島本へと移ってしまったからであらうか。ともあれ、「本云」から始まって奥書が完全に一致していることから、「日高氏藏の古写本」なるものが、現在の紅梅文庫本だという可能性は充分に考えられるように思う。前田善子氏は池田氏に師事しており、「紅梅文庫」という文庫名も池田氏の命名だ<sup>注9</sup>という。加えて氏は紅梅文庫の集書にも助言していた<sup>注10</sup>というから、日高氏藏本が紅梅文庫に入つたとすれば、それは池田氏の紹介によつてなのかもしれない。

そこで池田氏が何を根拠に「なほ純粹な青表紙本の特性を伝えていた」と評価していたのか、紅梅文庫本を『大成』柏木巻の校異にあわせて調査してみると、大島本以上に定家本に近いことが分かった。すなわち『大成』では前田家尊經閣文庫藏藤原定家自筆「柏木」を底本に、大島本・横山本・榊原家本・陽明文庫本・肖柏本・三条西家本(本稿で言う日大本のこと)の六本との校異が記されているのだが、これに紅梅文庫本をあわせると、定家本に対する青表紙七本の異同総数は四八四例、個々の内訳は次のような結果となつたからである。

(鎌倉期写本)		(室町期写本)	
横山本	一四六例	肖柏本	一八六例
陽明文庫本	一四三例	三条西家本	二二八例
榊原家本	一〇八例	大島本	二二六例
		紅梅文庫本	一〇八例

紅梅文庫本の異同数(一〇八例)は榊原家本ともども最も少ない数値である。また三条西家本(一二八例)も大島本(一二六例)の数値とほぼ拮抗している。尤も「ありぬへきなど」(『大成』一二三八頁⑭行目)のくんだり、他の諸本が「ありぬへきことになんなをは、かりぬへきなど」とするのに対して、大島本だけが「ありぬへきなんと」とするなど、大島本は定家本と強い同調性を示した部分もあるのだが、柏木巻では比較的細かな異同が目立ったようである。<sup>註11</sup>

そのためか、柏木において紅梅文庫本は榊原家本と並び、大島本よりも定家本に親しいのであった。また前稿で指摘したように、『藤原定家自筆本 源氏物語奥入』にみえる定家の残存本文(定家の手沢本であったところの、いわゆる「六半本」)から、奥入と共に切り取られた巻末本文)と比較すると、紅梅文庫本は訂正前の大島本文よりも残存本文に親しく、訂正後の大島本とはほぼ同じ位相を示したのであった。とはいえ、室町期における源氏物語の写本づくりは、取混ぜ本を寄合書きで作成することが多かった。柏木の場合はこのような結果となったが、巻によって本文の位相が異なる可能性は十分にある。全巻を通じての調査が必要不可欠な所以である。

(三) 紅梅文庫本を通して見えてきたもの

紅梅文庫本の存在意義は、今は散逸した(文明本)の概要が、この紅梅文庫本によって明らかになる点にある。

そのことが判明する以前は、(享禄本)(すなわち現行の日本本)以外の実隆手沢本が悉く散逸していたこともあって、実隆の源氏物語本文を論じる際には、主に宮内庁書陵部蔵本(以下、書陵部本と略)と日本本とが、取り挙げられてきたのだった。この二本について少し確認しておこう。

まず書陵部本だが、同本には、

「此物語五十四帖以青表／紙証本令書写校合 銘是／当代宸翰也 殊可謂珍奇／可秘藏々々／權大納言藤実隆(花押)」

(桐壺卷)

「此物語以青表紙／証本終全部之書／功者也／亜槐下拾遺小臣(花押)」(夢浮橋卷)

という、実隆権大納言時代(一四八九～一五〇六)の奥書があって、「以青表紙証本」とあること等から、岩波日本古典文学大系本(旧大系)の底本に採用された本文である。

一方の日本本には、

「享禄四年正月廿二日終書写之／功者也／槐陰道遙叟堯空」(夢浮橋)

などの書写奥書があり、実隆が晩年(七十七歳)、出家してからの書写であることが判る。底本の一つが「夢庵所持之古本」(『公記』)であったが、日大本花宴巻に

「本(肖柏筆)／以京極黃門(定家卿)自筆校合畢(十六枚)」

という(おそらくは肖柏の)本奥書があり、それに続けて実隆の

「享祿三年正月十九日書了／奥入以別紙写之(二月廿八日一校了)／桑門堯空(七十六歳)」

という書写校合奥書があることから、少なくとも日大本花宴巻の底本は、定家自筆本との校合を経た写本であり、かつ巻末に奥入を有した本文だったことが分かる。この日大本は『大成』に校合本(略号「三」として採用されている。

さてこの書陵部本と日大本は、片や権大納言時代の三条西家本、片や晩年になってからの三条西家本と見做され、共に実隆の青表紙本とみなされてきた。しかし

(a) 池田龜鑑氏が青表紙原本と認定した(四半本)四帖(柏木・花散里・行幸・早蕨)との親近度は、大島本に及ばないこと

(b) 両本共に、一部に河内本系の本文が紛れていること。

(c) 更に書陵部本の場合は、河内本系の巻(玉鬘・匂兵部卿)や、別本の巻(須磨・梅枝・柏木・宿木)まで含まれ

ていること。

等の傾向が明かになると、青表紙本としての純度というものを考えてみた場合、換言するならば、池田亀鑑氏が青表紙原本と認定した（四半本）との親疎関係からみて、三条西家本は大島本には及ばないことが明らかになった。就中書陵部本については、大島本と大きく乖離した部分が目立ち、かかる本文に「以青表紙証本令書写校合」と揮毫した実隆の、（青表紙本）観そのものに対する不審感さえ生じていったようである。例えば阿部秋生氏は、書陵部本について次のように解説している。

その本文は、いわゆる伝定家本をはじめとする鎌倉期書写の青表紙本とはかなり距離のあるもので、むしろ室町期書写の青表紙の本文に近く、現象的に言えば、河内本に一段と近い形を往々にしてみせる本文である。：（中略）定家の作った青表紙原本の意ではなく、実隆が認めた「青表紙証本」、即ち三条西家の家の「証本」の意であろうと  
思われる。<sup>注12</sup>

しかし稿者は、前稿において（狭義の三条西家本）、すなわち（実隆が自身の手沢本として作成し、三条西家で実際に用いられてきた本文）の系譜から、この書陵部本は除外すべきだと論じた。理由は以下の四点である。

第一に、書陵部本に三条西家の蔵書印は無く、現行の蔵書印は書陵部の印のみであること。また書陵部本は豪華な装丁で、全冊見事なまでに書式が統一されており、実隆が奥書の署名に「亜槐下拾遺小臣」（夢浮橋）と謙称を用いていること等から、貴顕に献上するために作成された写本と見られること。

第二に、書陵部本は寄合書きで、実隆も篝火巻の書写を担当している。その際彼は（文明本）を書写していたことが、



紅梅文庫本の調査によって判明した。一方書陵部本の他の巻々、就中河内本系とされる玉鬘・匂宮や、別本とされる須磨・梅枝・柏木・宿木は、紅梅文庫本とは全く異なっている。つまり書陵部本は実隆の(「文明本」)をもとに全冊書写されたものではなく、様々な底本をもとにして作成した、取混ぜ本だったということである。

第三に、ではどの巻にどの写本を宛てるかといった底本の選定を、実隆が行っていたのかといえ、どうもそうとも思われない。なぜなら(「文明本」)のなかでも実隆が最も自負していたのは、宗祇持参の「青表紙正本箒木」と校合済みの箒木巻だったろうから、仮に底本の選定が実隆に任せられたとしたならば、箒木には当然(「文明本」)を用いたと思われる。しかし実際には、紅梅文庫本を書陵部本箒木の底本とは判定できないからである。

第四に、書陵部本には全冊に校合を終えたという実隆の花押が押してある。では実隆は、清書されて戻ってきた書陵部本を、全巻(「文明本」)で校合し訂正したのだろうか。だが紅梅文庫本と異同がみられる箇所でも書陵部本には何も記されておらず、この仮説は成り立たない。おそらく実隆は、寄合書きの参加者たちが底本通り書写しているかを確認したのだろうと思われること。

ことほどさように、書陵部本は貴顕に献上するために作成されたものであり、そこに実隆の主體的な関与は見い出しがたいのである。慥かに実隆は箒木の書写を担当し、全冊校合し、奥書を起草した。だがそれは命じられたことだったのではあるまいか。奥書に「以青表紙証本令書写校合」と揮毫したのも、発起人や底本提供者たちへの配慮が働いてのものではなかったかと思われる。以上が、(「狭義の三条西家本」)の系譜から書陵部本を外し、散逸した(「文明本」)の代わりとなる紅梅文庫本を置いて再検討してみるべきだと主張する所以である。

猶、「なぜ、いま、三条西家本なのか」という問題については、稿を改め、紅梅文庫本の影印に併せて詳述していきたい。

付、紅梅文庫本影印「桐壺」「簪木」

【書誌】

- 一、紺無地誂三帙入り。帙題簽「源氏物語」三條西実隆本伝写／足利末期古写本。全五十三帖の内 上(中・下)帙「月明莊」。  
写本五十二帖(蓬生巻と若菜上巻欠、総角は元禄十三年の後補)。
- 一、列帖装(四孔。紺色糸他)。少なからざる帖が綴糸の切れたままの状態となっている。
- 一、表紙寸法、桐壺巻の場合、縦十八・〇×横十八・四糎。全冊ほぼ同じ六半本。
- 一、全冊、紺無地紙表紙で中央に紅色書題簽(寸法、縦十・八×横二・五糎)を押す。巻名のみを墨書し、題字は総角巻を除き全冊一筆。また総角を除く各冊後見返し等に、巻序と巻名を墨書した付箋を有する。
- 一、本文料紙、楮斐漉き交ぜ。
- 一、全冊前遊紙一丁をおいて二丁表より書写し、片面十行、和歌は改行一字下げの分ち書きで、後続の地の文がそのまま続く形式。後遊紙は多くが一、二丁で、最大でも三丁(玉鬘と夢浮橋のみ)で収まる。
- 一、夢浮橋巻に次の本奥書がある。

本云

此物語五十四帖以侍従大納言実一卿

自筆本上臈局(法雲院)左大臣女手自被書

写者也深秘不可遣他所而已

明応四年六月一日

李部王判

1 注

一、冒頭三丁を確認した限り、全冊青表紙本系。但し各帖巻末に奥入は無い。また朱墨両筆による句点・鉤点・本文訂正・異文表示、稀に読み仮名や注記が加わる。これらの加筆は総角巻を除く全冊に見られる。

一、総角巻の奥に当該冊の書写奥書と識語がある。

「此巻帖或人依／所望書了／元禄十三年四月日 権中納言隆真」(一二四丁裏・書写奥書)

「油小路中納言殿」(一二五丁表・付箋)

後補者「隆真」は油小路中納言隆真のことか。

一、行幸巻に次の付箋がある。

「采菊女一位殿と申／筆にて候と京山田／久海被申候／〔川勝宗久は一位殿より古て□カあと也〕

一、蔵書印は「紅梅文庫」(単郭朱文方印、前田善子氏)のみ。

井上宗雄「中世歌壇史の研究 室町前期」(昭和五十九年改訂新版、風間書院)によれば、「若年の実隆が、後年貴族社会における最高の文化人・古典学者として君臨しえた素地はこの時期から形成されて行つた」(二二二頁)とする。

『国史大事典』(昭和六十年 吉川弘文館)所収「後柏原天皇」項。

引用は『実隆公記』(昭和五十四年第二刷、続群書類従完成会刊)によつた。但し割注部分は「」印で示し、私に句読点や傍線を施した。以下同様。

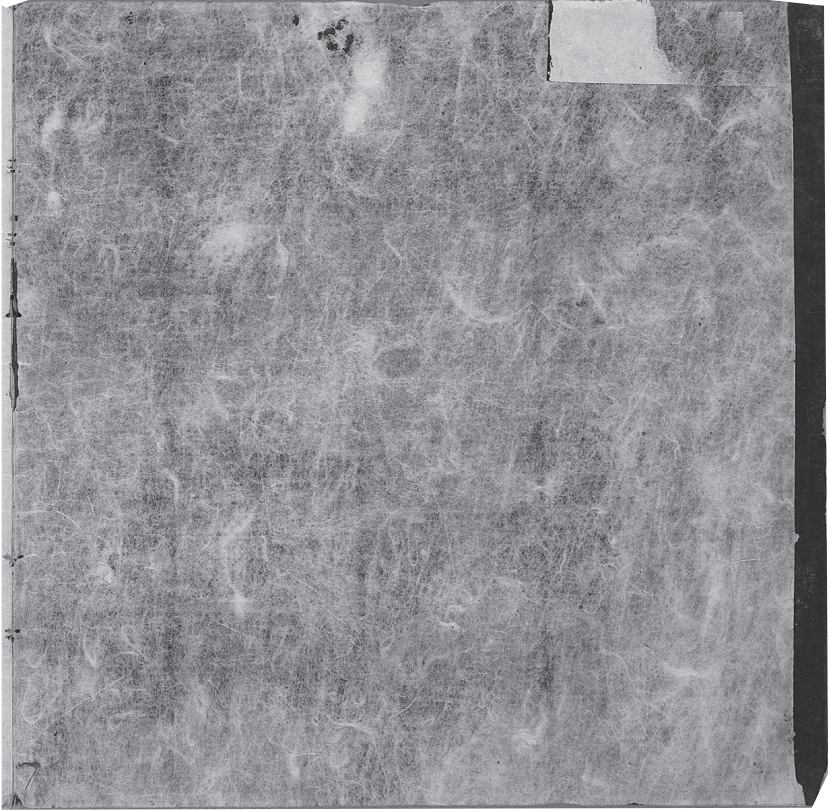
4 享禄二年八月二十五日「姉小路源氏十七帖、中院被送之。」・享禄四年五月二十二日「姉小路源氏十八冊、遣中院。悉所返送也。若菜上、在師賢朝臣所。理覚院可被相届之由、遣了。」等々。

5 邦高親王時代から五十年ほど遡つてしまふが、『看聞日記』によれば、伏見宮家には「廊御方・東御方・南御方・春日・近衛」等とともに、「上臈」という女房名もみえている。よつてここも「上臈」とは「上級の女房」という意味では無く、固有名詞として用いられたと判断しておく。

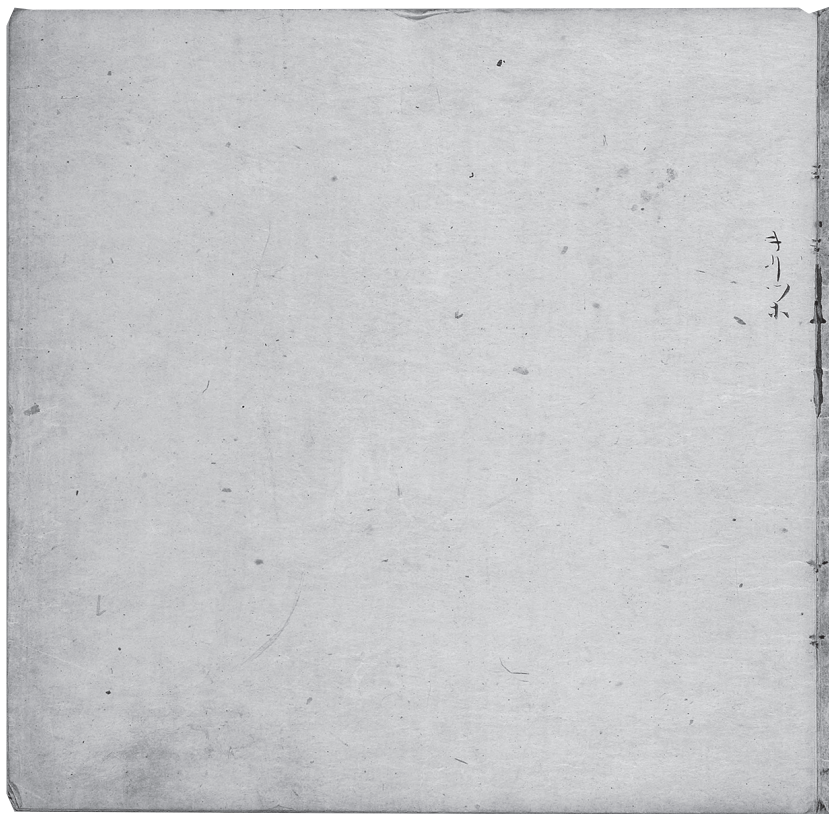
- 6 実隆は姉小路家で作成された(文明本)の転写本についても、同家の依頼を請け「銘」を記しており、『公記』には姉小路羽林源氏物語新写五十四帖出来持来之、令一見之(予先日書銘、以予本所写也)。(明応六年正月二十八日条)とある。なお書陵部本の実隆奥書に「銘是当代宸翰也」とあるが、この場合の「銘」は後柏原天皇宸筆の外題のことのようである。一方、日記によれば、題簽を揮毫した場合には「外題五十四帖今日染筆了」(文明十八年八月四日条)などと記した場合もあり、どうも一定しない。なおこの三冊を公衆が書写したとすることは、大東急記念文庫蔵「久原文庫本源氏物語」にみえる細川幽齋らの記述に拠った。
- 7 『源氏物語大成』(昭和五十四年第八刷、中央公論社)。
- 8 『日本古典籍書誌学辞典』(一九九九年 岩波書店)「前田善子」項。
- 9 「文学部日本文学科創設五〇周年・池田亀鑑誕生一二〇年没後六〇年・東海大学蔵桃園文庫目録完成記念」桃園文庫展―池田亀鑑の仕事―(二〇一五年)二月 東海大学文学部日本文学科・東海大学附属図書館刊)展示目録。
- 11 異同調査に際し、対校本はすべて訂正以後の本文と比較した。訂正による本文の変容が大きいとされている大島本だが、柏木の場合、大島本が訂正によって定家本と対立したのは二例である。
- 12 「底本・校合本解題」(昭和五十八年第一二版 小学館『日本古典文学全集 源氏物語(六)』所収



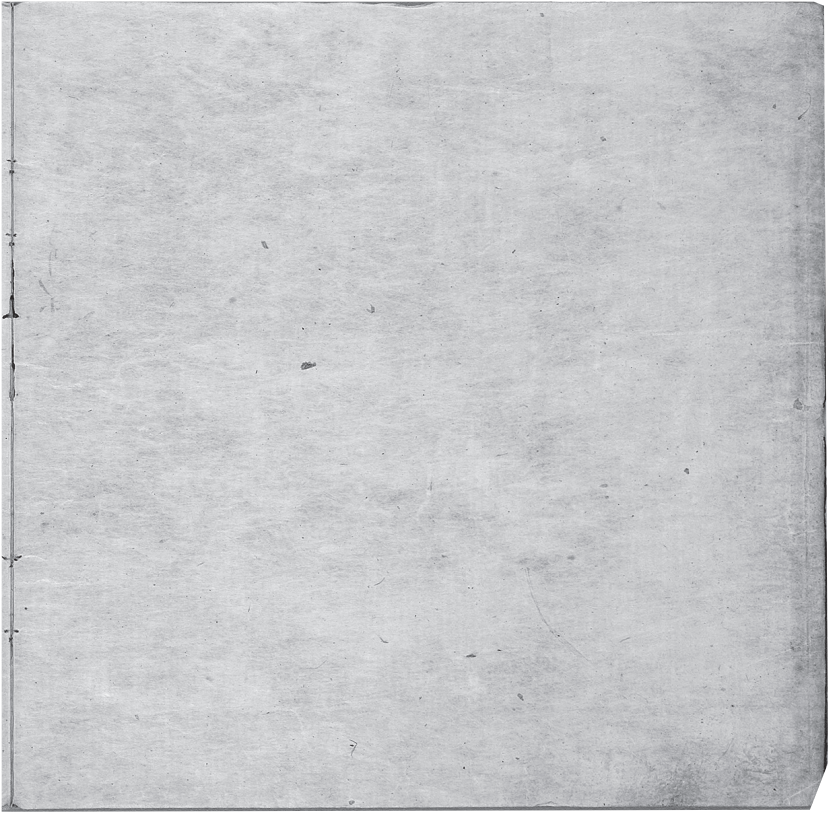
表紙



前表紙裏面（前見返となる料紙が剥れた状態）

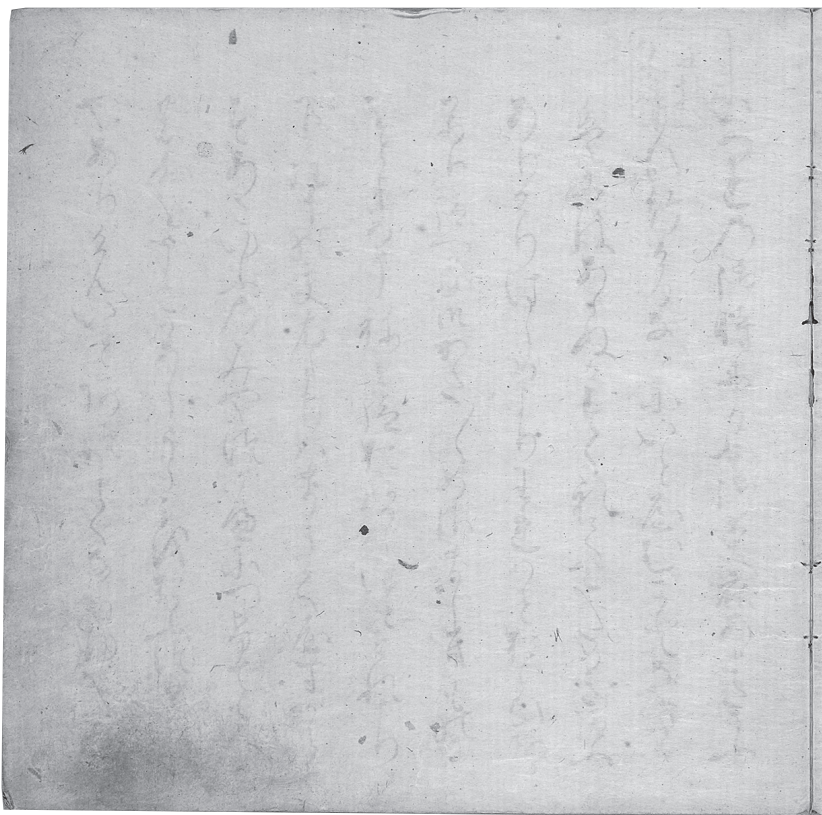


剥れた前見返(糊付部分)

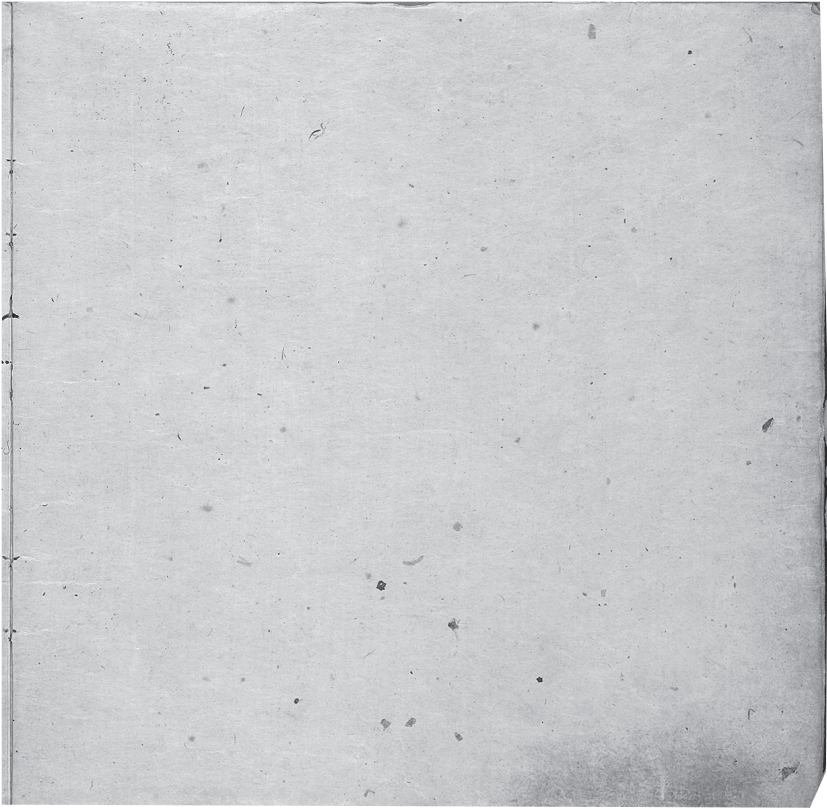


前見返





前遊紙1オ



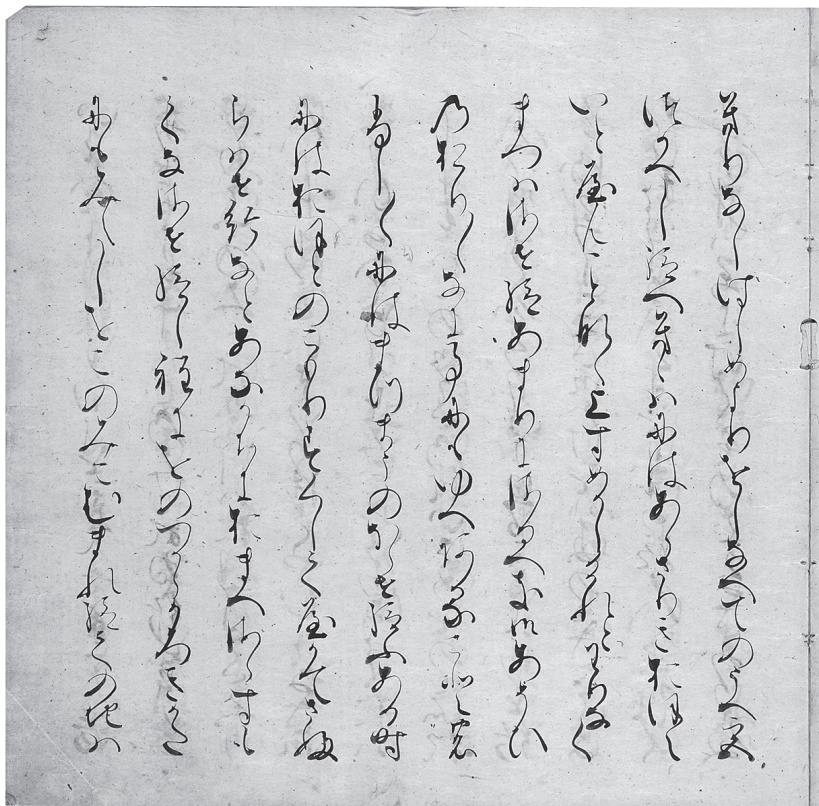
前遊紙1ウ







Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns from right to left. The text is written on a light-colored paper with visible binding marks on the left edge.



Handwritten text in vertical columns, likely a page from a Japanese manuscript. The text is written in a cursive style (sōsho) and is arranged in approximately 12 columns from right to left. The characters are dark ink on a light-colored paper background.

いふ公に上はたわしとて是を子色とて坊  
妙もよりきすといふ今これお終ひの事な  
かりとてか今これ女侍にたはしきなり  
人よりけりといふもつとけりといふもつ  
たはしきといふもつとけりといふもつ  
たはしきといふもつとけりといふもつ  
たはしきといふもつとけりといふもつ  
たはしきといふもつとけりといふもつ  
たはしきといふもつとけりといふもつ

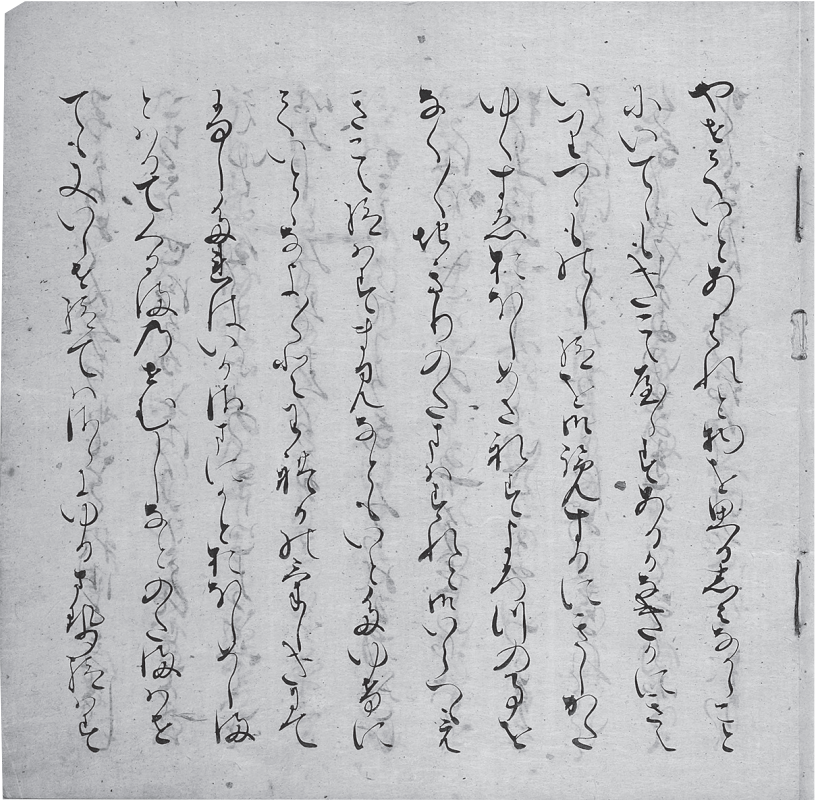


ふ傳中へたる物にあらはれしは  
かたじけなくもあらはれしは  
かたじけなくもあらはれしは  
かたじけなくもあらはれしは  
かたじけなくもあらはれしは  
かたじけなくもあらはれしは  
かたじけなくもあらはれしは  
かたじけなくもあらはれしは  
かたじけなくもあらはれしは  
かたじけなくもあらはれしは

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ



されあはれ公女とのこねていふは  
日に移りのほろもあふれぬがよ  
ちのあまほろもあふれぬがよ  
えしめとせまわりほろもあふれぬ  
あつまゝにせまわりほろもあふれぬ  
みことほろもあふれぬがよ  
やいほろもあふれぬがよ  
うほろもあふれぬがよ  
おほろもあふれぬがよ  
いほろもあふれぬがよ



Handwritten text in vertical columns, likely from a Japanese manuscript. The text is written in a cursive style (sōsho) and is arranged in approximately 12 columns, reading from right to left. The characters are dark ink on a light-colored paper background.



Handwritten text in cursive style (sōsho) on aged paper, arranged in ten vertical columns. The text is a copy of a section from the Genji Monogatari (Genji Tale).

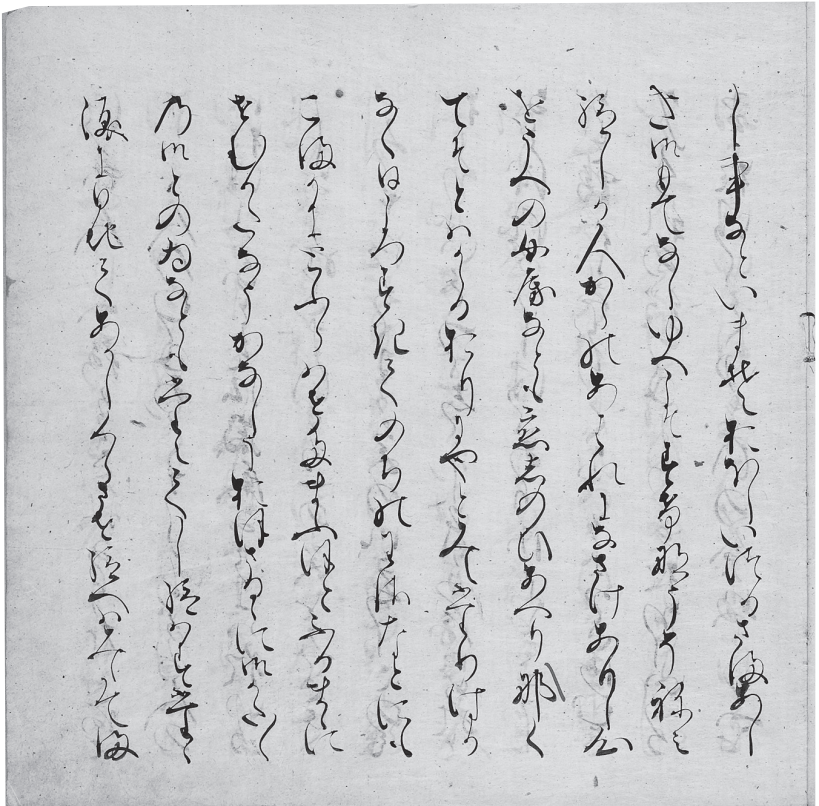
7才

Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, arranged in approximately 12 horizontal lines. The text is written in black ink on a light-colored, aged paper. The script is highly stylized and fluid, characteristic of the 'Nasta'liq' style. The lines are roughly parallel and fill most of the page's width. There are some faint markings and a small rectangular stamp or mark on the left side of the page, near the top edge.



にほちまはしつとてはくはりてたはらへ  
あつのはらまへんやうにほちまはしつ  
この中へくちまはしつとてはらへ  
あつのはらまへんやうにほちまはしつ  
あつのはらまへんやうにほちまはしつ  
あつのはらまへんやうにほちまはしつ  
あつのはらまへんやうにほちまはしつ  
あつのはらまへんやうにほちまはしつ

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in vertical columns. The text is written on a rectangular piece of paper with a slightly aged, greyish tone. The script is dense and fluid, with varying line thicknesses and some decorative flourishes. The columns are roughly parallel to each other, filling most of the page's width. The paper has a small mark on the left edge, possibly a staple or a fold.

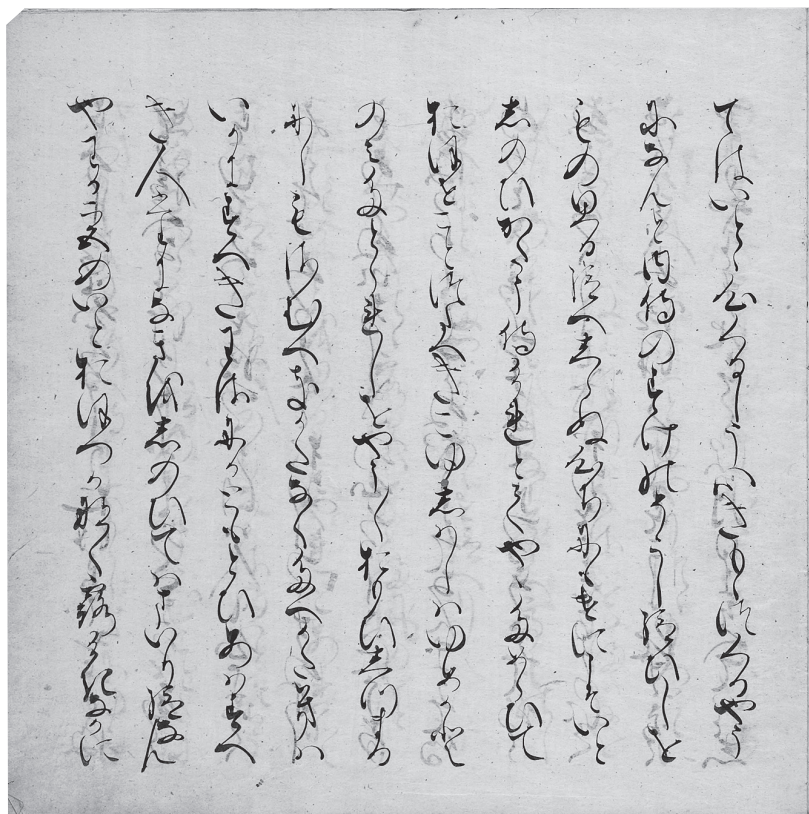


し事あはれし世もたれしはつらき海あり  
さゆきあはれし世もたれしはつらき海あり  
つらき人あはれし世もたれしはつらき海あり  
さゆきあはれし世もたれしはつらき海あり  
つらき人あはれし世もたれしはつらき海あり  
さゆきあはれし世もたれしはつらき海あり  
つらき人あはれし世もたれしはつらき海あり  
さゆきあはれし世もたれしはつらき海あり  
つらき人あはれし世もたれしはつらき海あり  
さゆきあはれし世もたれしはつらき海あり



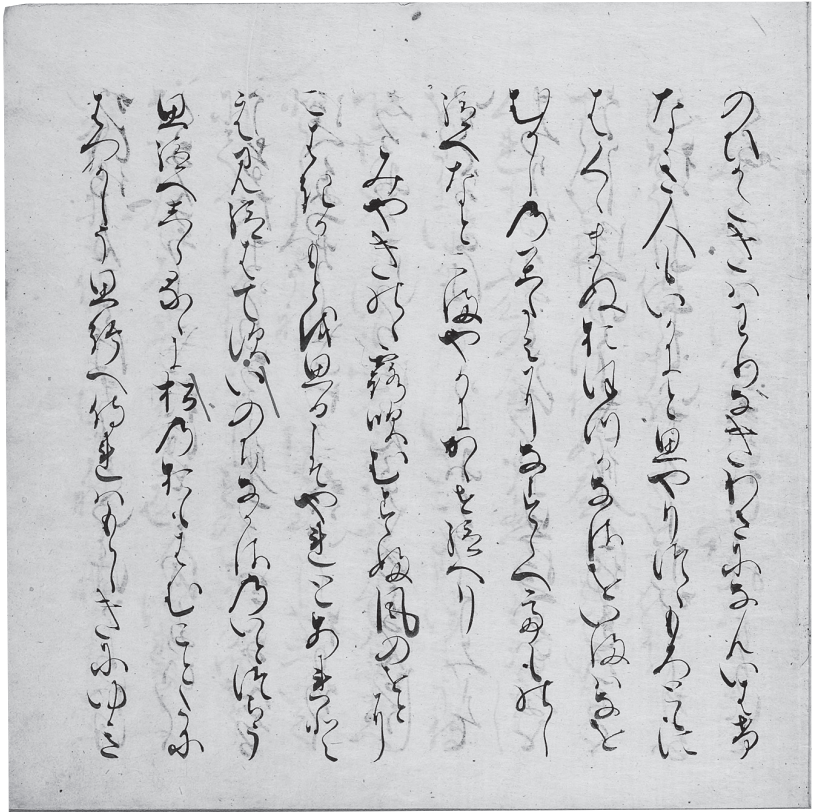
此のうらむはみづかきみづかき  
みづかきみづかきみづかき  
みづかきみづかきみづかき  
みづかきみづかきみづかき  
みづかきみづかきみづかき  
みづかきみづかきみづかき  
みづかきみづかきみづかき  
みづかきみづかきみづかき  
みづかきみづかきみづかき  
みづかきみづかきみづかき

あはれなる御心にてはなれども  
おぼつかぬ御心にてはなれども  
おぼつかぬ御心にてはなれども  
おぼつかぬ御心にてはなれども  
おぼつかぬ御心にてはなれども  
おぼつかぬ御心にてはなれども  
おぼつかぬ御心にてはなれども  
おぼつかぬ御心にてはなれども  
おぼつかぬ御心にてはなれども  
おぼつかぬ御心にてはなれども



とくは流るるをいへばはるるは  
り流るるをいへばはるるは  
をいへばはるるをいへば  
みよまらるるをいへば  
とくは流るるをいへば  
あはるるをいへば  
あはるるをいへば  
あはるるをいへば  
あはるるをいへば  
あはるるをいへば





Handwritten text in vertical columns, likely a page from a Japanese manuscript. The text is written in a cursive style (sōsho) and is arranged in approximately 10 columns from right to left. The ink is dark on a light-colored paper background.

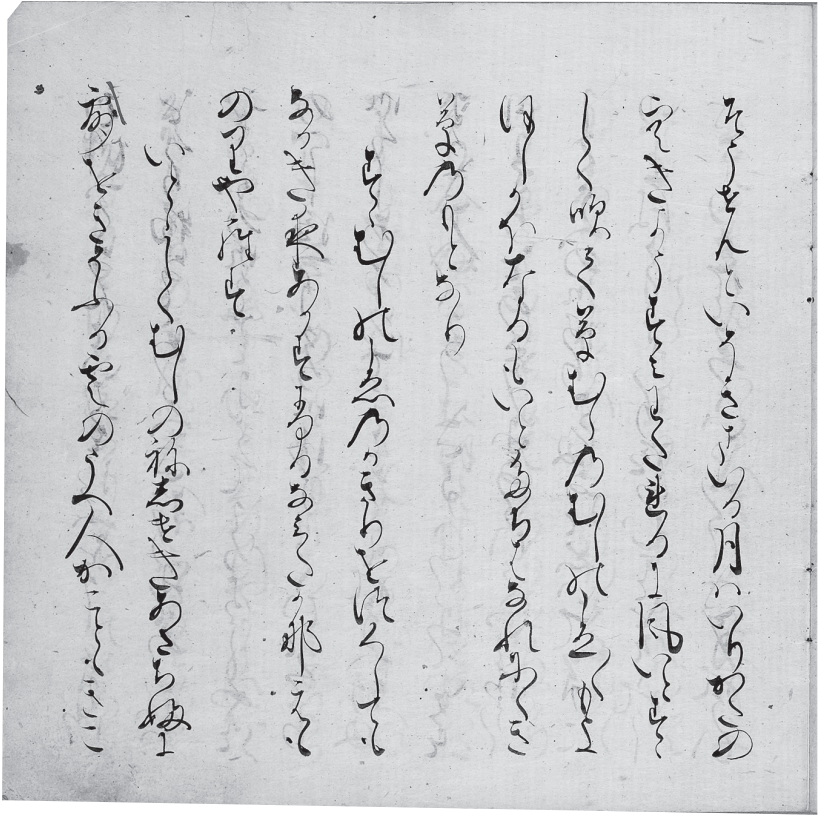
かひゆんこまはまうこまはまうはは  
かまんまうこまはまうこまはまうは  
かまたまうりあひあうこまはまんま  
かまあまうこまはまうこまはまうは  
かまあまうこまはまうこまはまうは  
かまあまうこまはまうこまはまうは  
かまあまうこまはまうこまはまうは  
かまあまうこまはまうこまはまうは  
かまあまうこまはまうこまはまうは  
かまあまうこまはまうこまはまうは

つみかそははりてくつくありては  
とをりてはつみかそははりては  
つみかそははりてくつくありては  
つみかそははりてくつくありては  
つみかそははりてくつくありては  
つみかそははりてくつくありては  
つみかそははりてくつくありては  
つみかそははりてくつくありては  
つみかそははりてくつくありては  
つみかそははりてくつくありては

公ありて人小くお大納言ははとなり  
まゝとありて人のまづりぬいまい  
とあつとよめてすも世経きなりあ  
くはたつて思ふにたつとぬい  
めと世経きははとくくくく  
およ人なまゝありてい中へもあ  
事と思ふにありてあつとぬい  
まゝとありてありてありてあり  
身にあたりてあつとぬいあり  
あつとありてありてありてあり

かろしきまゝいづるも人の心も  
あつていづるもいづるもいづるも  
よいかつふよいかつふよいかつふ  
あつていづるもいづるもいづるも  
あつていづるもいづるもいづるも  
あつていづるもいづるもいづるも  
あつていづるもいづるもいづるも  
あつていづるもいづるもいづるも  
あつていづるもいづるもいづるも  
あつていづるもいづるもいづるも

人乃ちちりおまんちいけいん人  
のともあがりるあついでいん  
こり人のゆふをあついでいん  
人のうへいいんをいん  
をいんせりせり公ねいん  
いん人いんいんいん  
いんいんいんいんいん  
いんいんいんいんいん  
いんいんいんいんいん  
いんいんいんいんいん



まけくまんとくをばしとく一歩  
とくり物まゝのりかたはあはれ  
かたのりまゝのりかたはあはれ  
のりかたはあはれまゝのりかた  
まゝのりかたはあはれまゝのり  
かたはあはれまゝのりかたは  
あはれまゝのりかたはあはれ  
まゝのりかたはあはれまゝのり  
かたはあはれまゝのりかたは  
あはれまゝのりかたはあはれ





くぬい見しり長恨なれぬ志亭子ほ  
くを流る伊勢つゆふいしを流る  
あふしつゆの葉はなを流る  
あふしつゆの葉はなを流る  
あふしつゆの葉はなを流る  
あふしつゆの葉はなを流る  
あふしつゆの葉はなを流る  
あふしつゆの葉はなを流る

こゝろにんをまゐりて公まきになしやうみ  
みづらうりていふたはあちりてうた  
りていふたはあちりてうた  
みづらうりていふたはあちりてうた  
のいりていふたはあちりてうた  
こゝろにんをまゐりて公まきになしやうみ  
みづらうりていふたはあちりてうた  
りていふたはあちりてうた  
みづらうりていふたはあちりてうた  
のいりていふたはあちりてうた





いづれにぞあらんちを流しつらき  
はらふらふのちれはなほしむるまじ  
しつら母のまじりのまじりまじ  
みまじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじり  
月のまじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじり

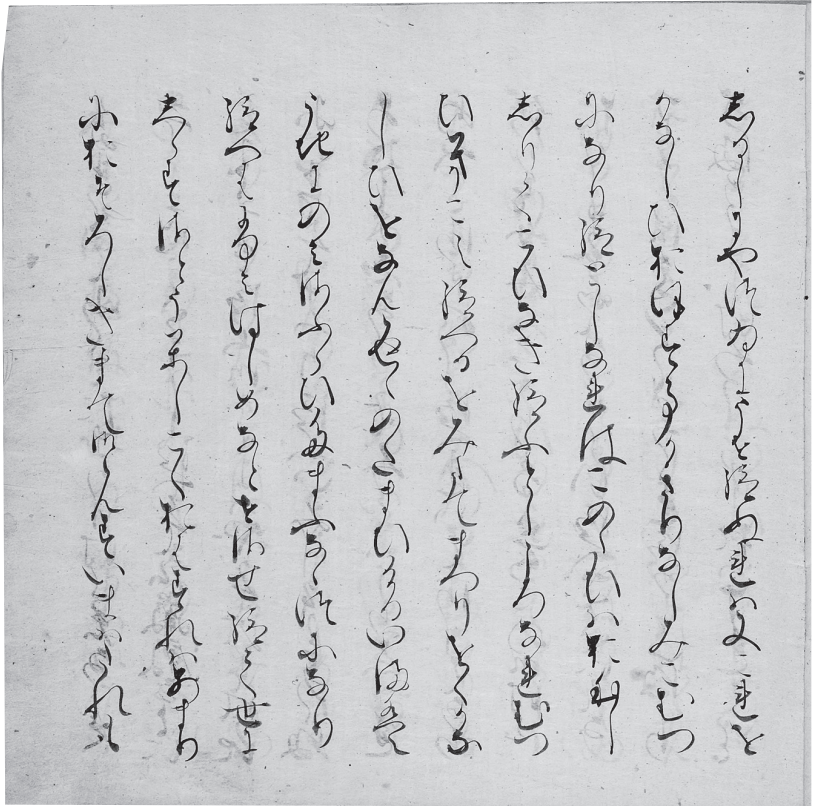
可いぬあまのふりていふ  
をたぬらうらうらうらうら  
月とつらぬ  
そのふりていふあまの月  
いふらうらうらうら  
をりつらうらうらうら  
わらうらうらうらうら  
いふらうらうらうら  
いふらうらうらうら  
いふらうらうらうら  
いふらうらうらうら

あはれとてはなれはなれはなれ  
あはれとてはなれはなれはなれ  
あはれとてはなれはなれはなれ  
あはれとてはなれはなれはなれ  
あはれとてはなれはなれはなれ  
あはれとてはなれはなれはなれ  
あはれとてはなれはなれはなれ  
あはれとてはなれはなれはなれ  
あはれとてはなれはなれはなれ  
あはれとてはなれはなれはなれ



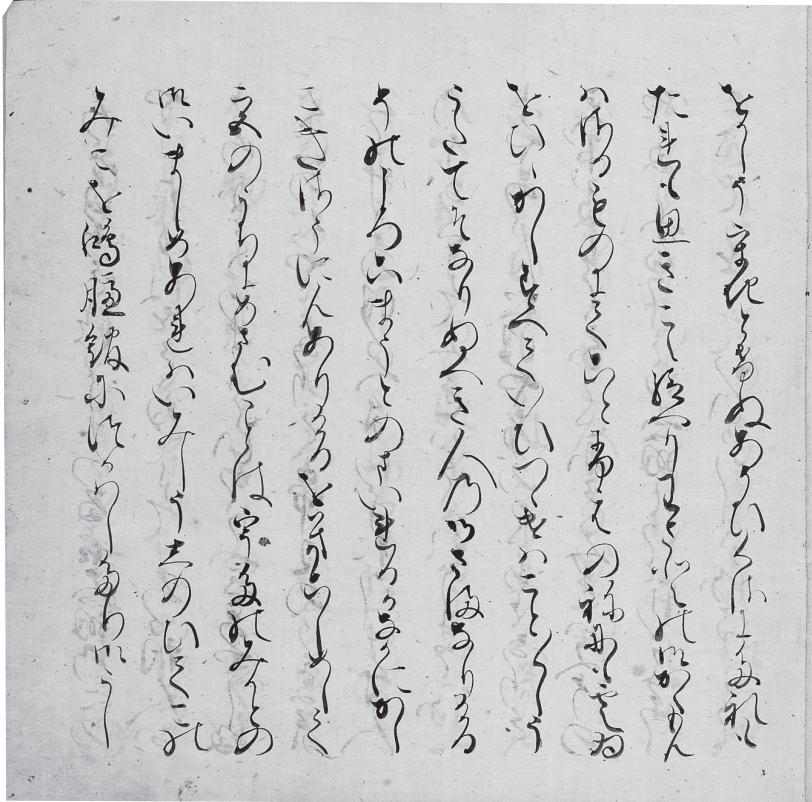
一  
契もいれりしうらむらうに人  
うらむらうに人うらむらうに  
こころにうらむらうに人  
あつたうらむらうに人  
なつたうらむらうに人  
人うらむらうに人  
うらむらうに人  
うらむらうに人





あつしやわらわしとほりまきよと  
まゝいふはふらふらりあひま  
よありほつしとまきよのいひた  
あつしとまきよとまきよのいひ  
いふしとまきよとまきよのいひ  
しといとまきよとまきよのいひ  
ははのいひとまきよのいひ  
まきよのいひとまきよのいひ  
まきよのいひとまきよのいひ  
まきよのいひとまきよのいひ

あめきふくあめきふくあめきふくあめきふくあめきふく  
あめきふくあめきふくあめきふくあめきふくあめきふく  
あめきふくあめきふくあめきふくあめきふくあめきふく  
あめきふくあめきふくあめきふくあめきふくあめきふく  
あめきふくあめきふくあめきふくあめきふくあめきふく  
あめきふくあめきふくあめきふくあめきふくあめきふく  
あめきふくあめきふくあめきふくあめきふくあめきふく  
あめきふくあめきふくあめきふくあめきふくあめきふく  
あめきふくあめきふくあめきふくあめきふくあめきふく  
あめきふくあめきふくあめきふくあめきふくあめきふく



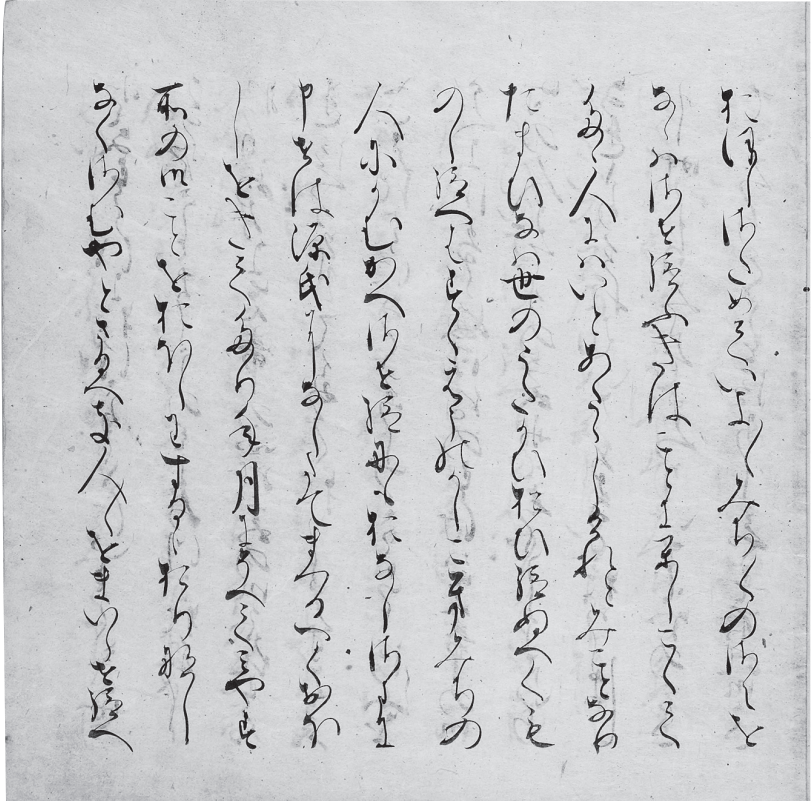
この書は、源氏物語の写本五十二帖のうちの一枚である。文字は、流麗な草書体で書かれており、墨の濃淡や筆の運びが非常に美しい。文字の配置は、右から左へと縦書きで、行間は適度に空けられている。全体的に、古典的な美しさと洗練された印象を与える。











24 オ

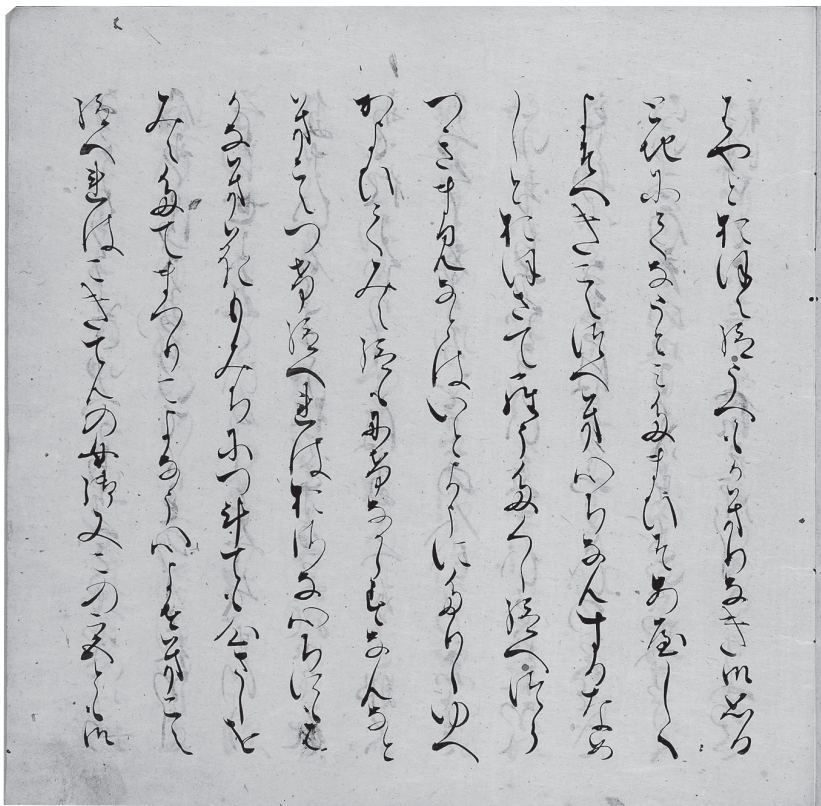
おのれをいふはまはるるをいふはまはるる  
あはれなるもあはれなるのさあはれなるは  
わたりあはれなる帝のいれあはれなる  
まはるるをいふはまはるるをいふはまはるる  
まはるるをいふはまはるるをいふはまはるる  
まはるるをいふはまはるるをいふはまはるる  
まはるるをいふはまはるるをいふはまはるる  
まはるるをいふはまはるるをいふはまはるる  
まはるるをいふはまはるるをいふはまはるる  
まはるるをいふはまはるるをいふはまはるる

ら上はさしあがり人にと代のちやほろり  
ほいさあわらうとえをさしあがりつるまは  
さいらりのちやほろりといふたはほ  
くおいてはちやほろりまわらうとくさ  
かひり人上あんとさしあがりまはこよ  
やと公とまはりちやほろりまはこよ  
かろらほいさあがりといふたはほ  
のちやほろりといふたはほ  
りあがりまはりまはりまはり  
ちやほろりまはりまはりまはり

うらたはほしめりあはるる福上りなれば  
まはるるあはるるあはるるあはるるあはるる  
あはるるあはるるあはるるあはるるあはるる  
あはるるあはるるあはるるあはるるあはるる  
あはるるあはるるあはるるあはるるあはるる  
あはるるあはるるあはるるあはるるあはるる  
あはるるあはるるあはるるあはるるあはるる  
あはるるあはるるあはるるあはるるあはるる  
あはるるあはるるあはるるあはるるあはるる  
あはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

Handwritten text in vertical columns, likely a page from a Japanese manuscript. The text is written in a cursive style (sōsho) and is arranged in approximately 12 columns from right to left. The characters are dark ink on a light-colored paper background.

流るるしるしの世をいふも終人よに  
んたははらきやういふもあつらひ  
いめもあまねにたれはさしほろ  
あつらひ流るるもあまねに  
まほしきとあつらひあつらひ  
あつらひあつらひあつらひ  
あつらひあつらひあつらひ  
あつらひあつらひあつらひ  
あつらひあつらひあつらひ

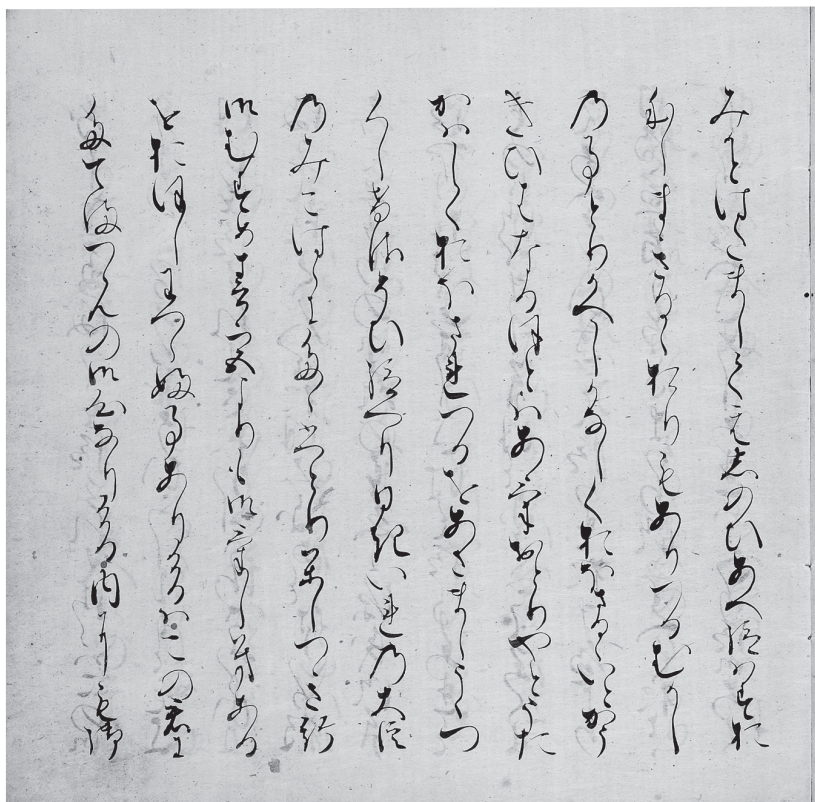


あつしんくさゆらちまのふたへり  
りあはれあちつてそのとたあ  
そらせしあけいりてふそまひり  
あまし若くすれんよりあはれぬ  
あはれぬわりのなまそんを郷く  
らうくあちつとこの人いりてあ  
こちあちつてあましむたえ  
とあちつてあましむたえ  
あちつてあましむたえ  
あちつてあましむたえ  
あちつてあましむたえ



ちたりしつゝあまのつらきありあつては  
とくしつゝあまのつらきありあつては  
南敵ふきありあつては  
かりしつゝあまのつらきありあつては  
あまのつらきありあつては  
あまのつらきありあつては  
あまのつらきありあつては  
あまのつらきありあつては  
あまのつらきありあつては  
あまのつらきありあつては

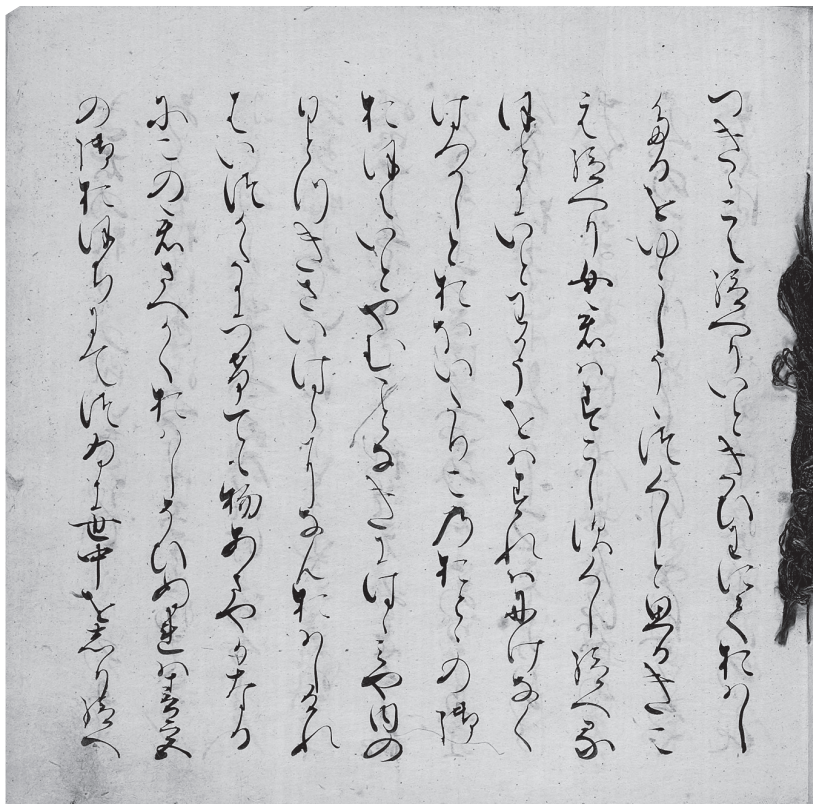
清きありけうの時をて深きありけ  
みほゆいほくはつらつらゆい  
はれりほくもたしあまり大なる  
人ほくまらひいせしあまり  
そくを公くしあまりいせしあま  
のみまらうあしれれつらにせし  
あまらふつしあまらふつしあ  
あまらふつしあまらふつしあ  
あまらふつしあまらふつしあ  
あまらふつしあまらふつしあ





乃物ぶの命ぬまのりくまあちたは  
ふはきいぬりくまあちたのまあち  
ぬりくまのまあち  
ぬりくまのまあち  
ぬりくまのまあち  
ぬりくまのまあち  
ぬりくまのまあち  
ぬりくまのまあち  
ぬりくまのまあち  
ぬりくまのまあち

是もあはれなりはるみけのりにな  
 さまのうしはらちほろ福えりてま  
 おもはれはるまの日はかりむの  
 こ物もたまふみんはあはれりて  
 けりし中をうりてしそりてく  
 らいひはるまをたしてまはる  
 けえ服のたりあはれまはる中  
 かはるまはるまはるまのまはる  
 かはるまはるまのまはるまはる  
 かはるまはるまのまはるまはる



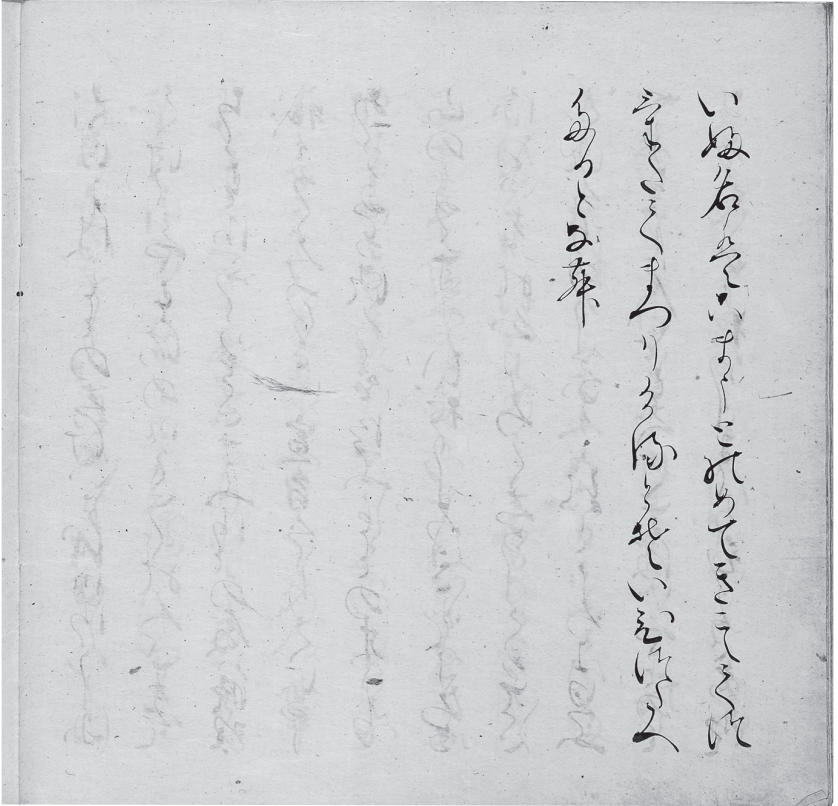
きよのねのりまらあひののり  
あをたはしはらひまはらひ  
ふとのうらまはらひまはらひ  
のかねはらひまはらひ  
れの中きひまはらひ  
いづちのりまはらひ  
なりのりまはらひ  
あひのりまはらひ  
あひのりまはらひ  
あひのりまはらひ

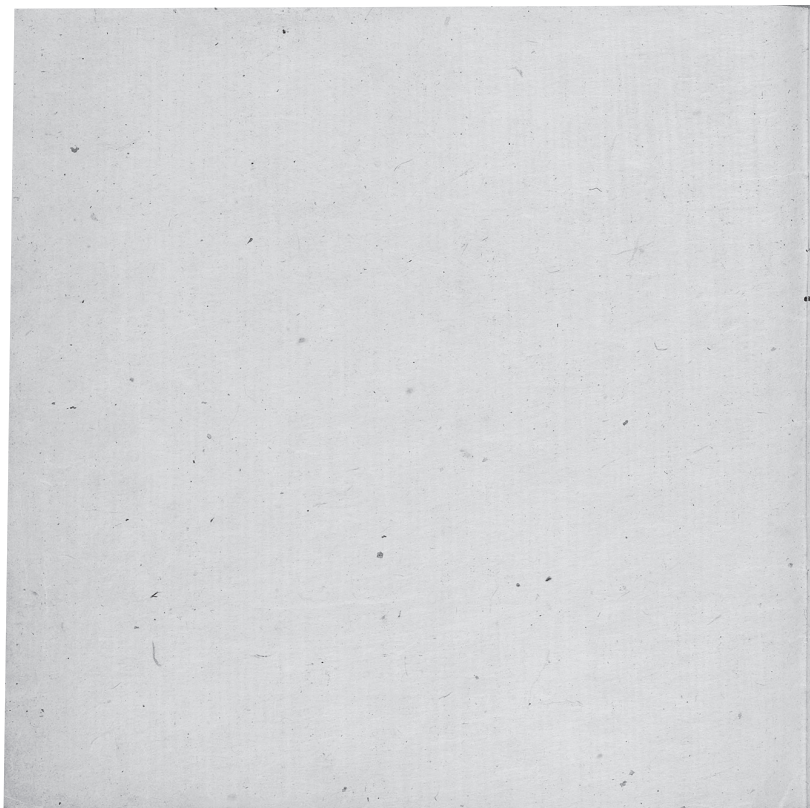


やほちりつたの清ありのなとあひ  
みとねのいそえそはあつて  
人としとあつた人非なるに  
つらまたはいとあつて  
おろしつとせり人としとあつて  
公あつてはつとあつて  
のいとしとあつて  
あつてはつとあつて  
あつてはつとあつて  
あつてはつとあつて  
あつてはつとあつて

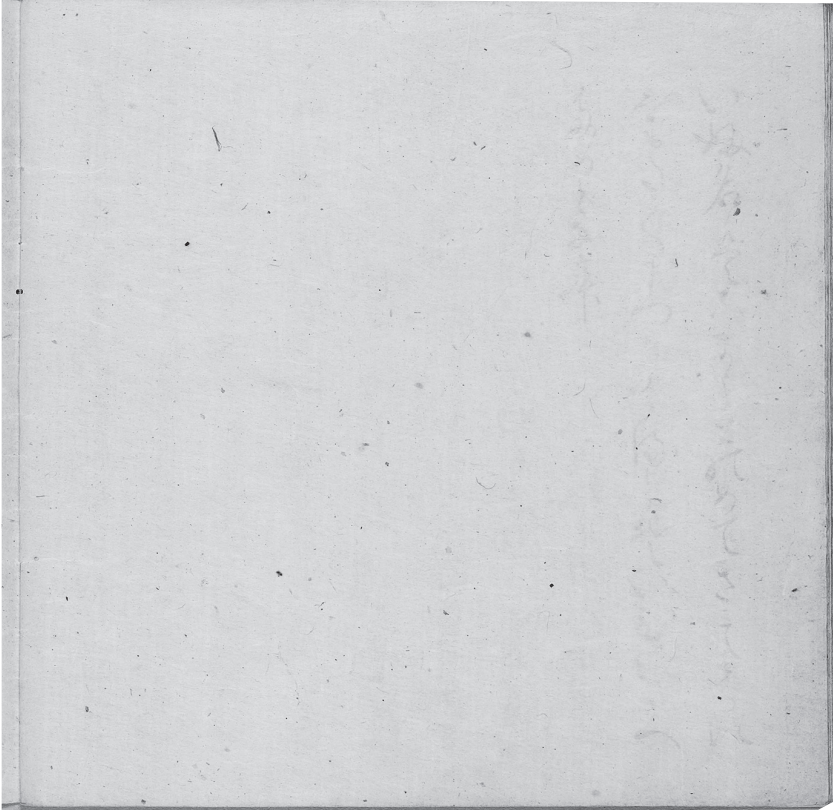
あまのむすぶるに  
あまのむすぶるに  
あまのむすぶるに  
あまのむすぶるに  
あまのむすぶるに  
あまのむすぶるに  
あまのむすぶるに  
あまのむすぶるに  
あまのむすぶるに  
あまのむすぶるに



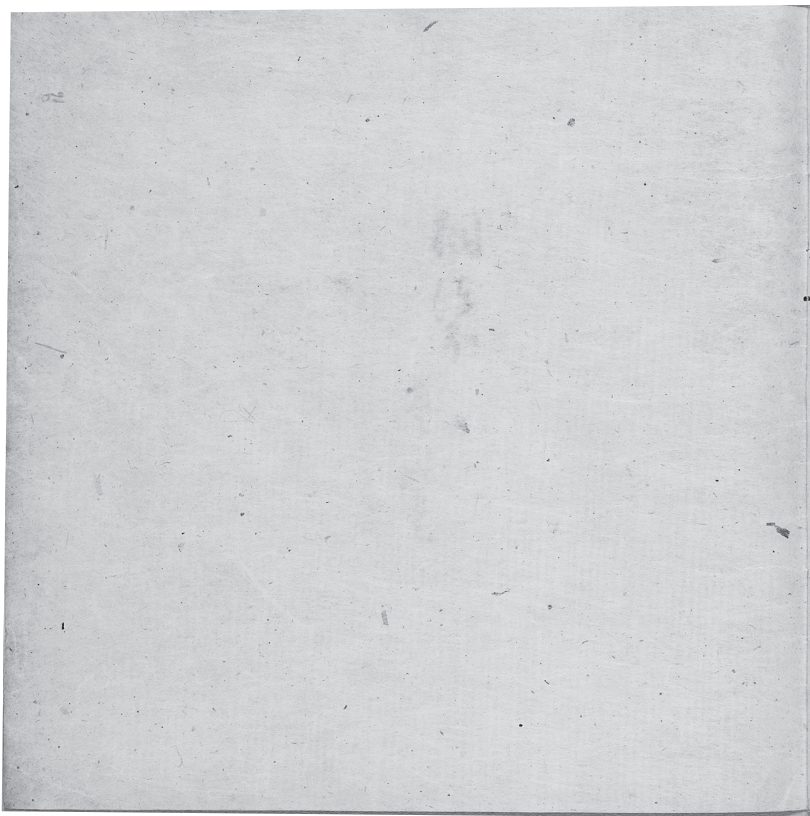




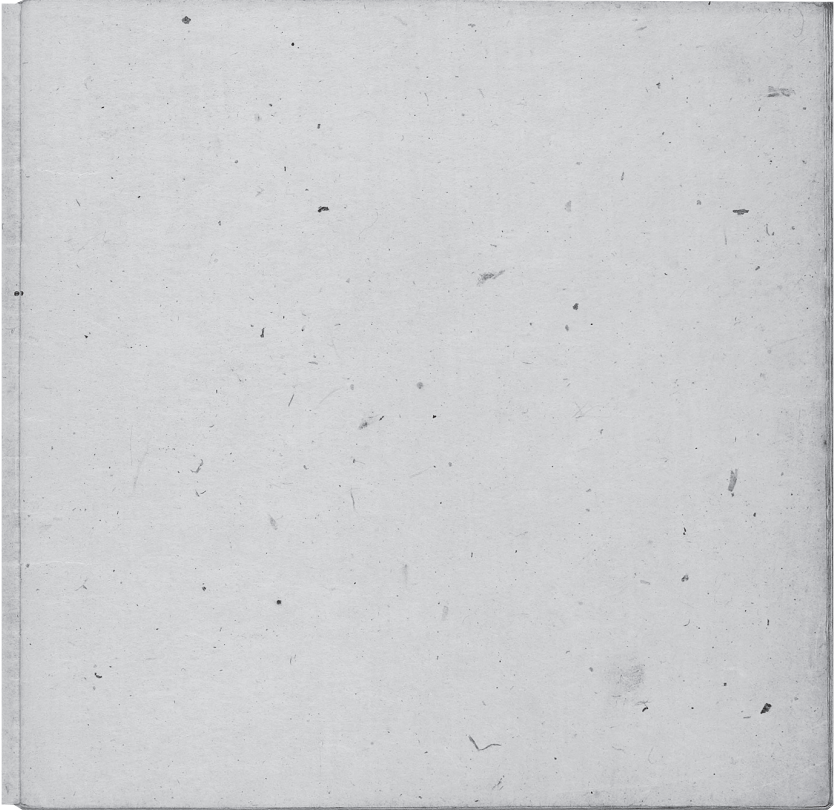
後遊紙 1才



後遊紙 1ウ

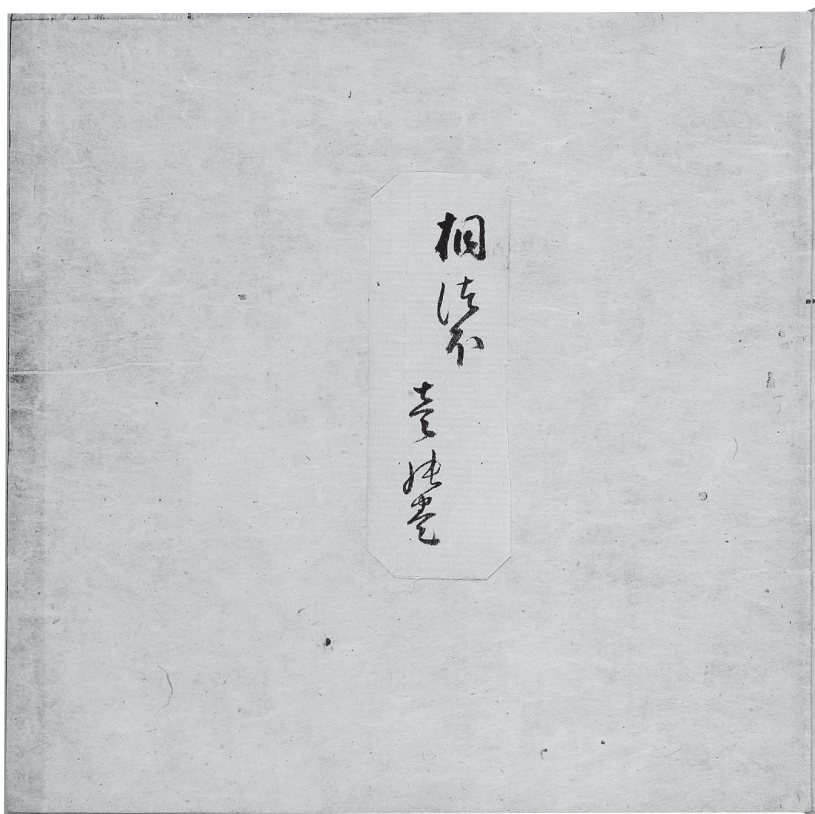


後遊紙 2才

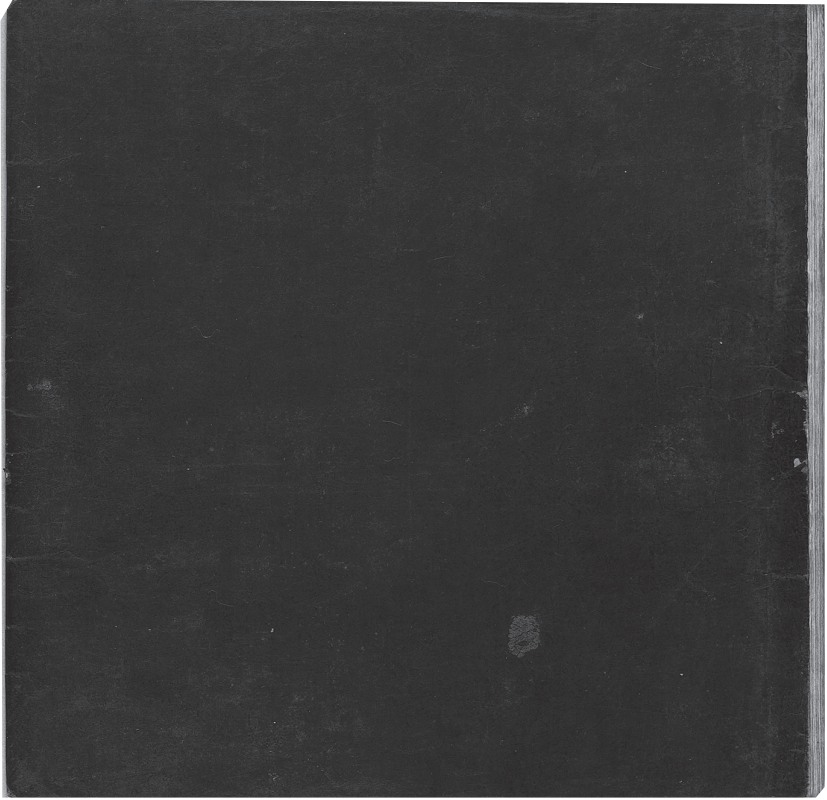


後遊紙 2ウ

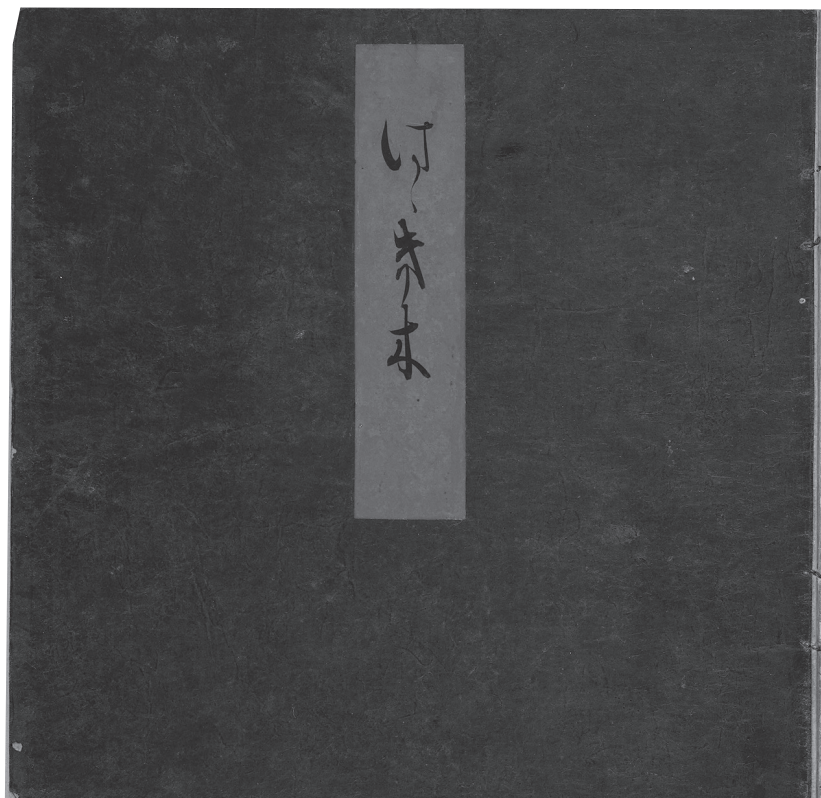




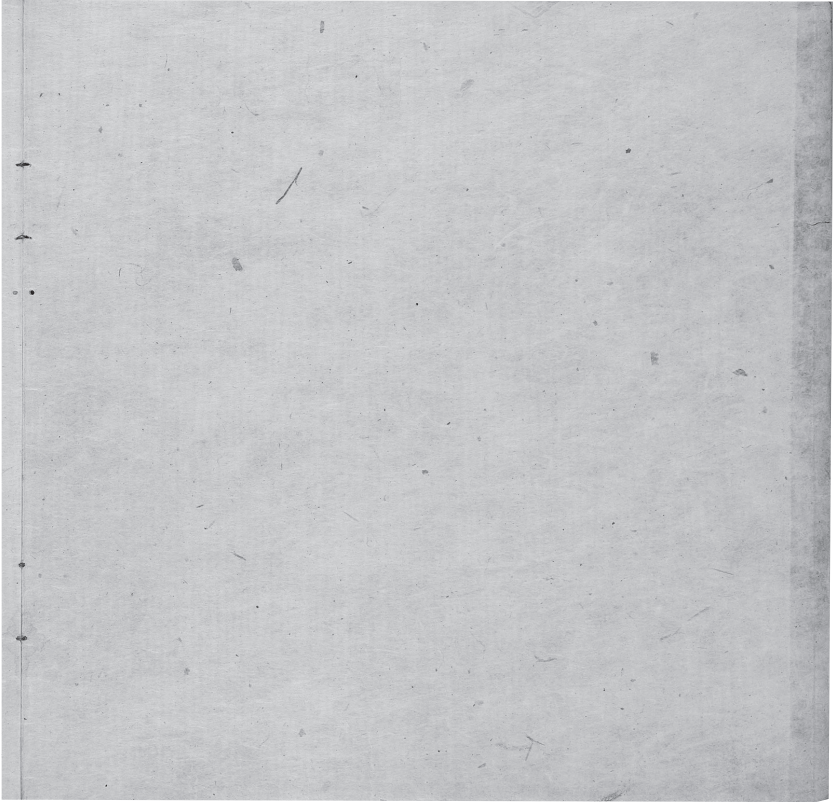
後見返



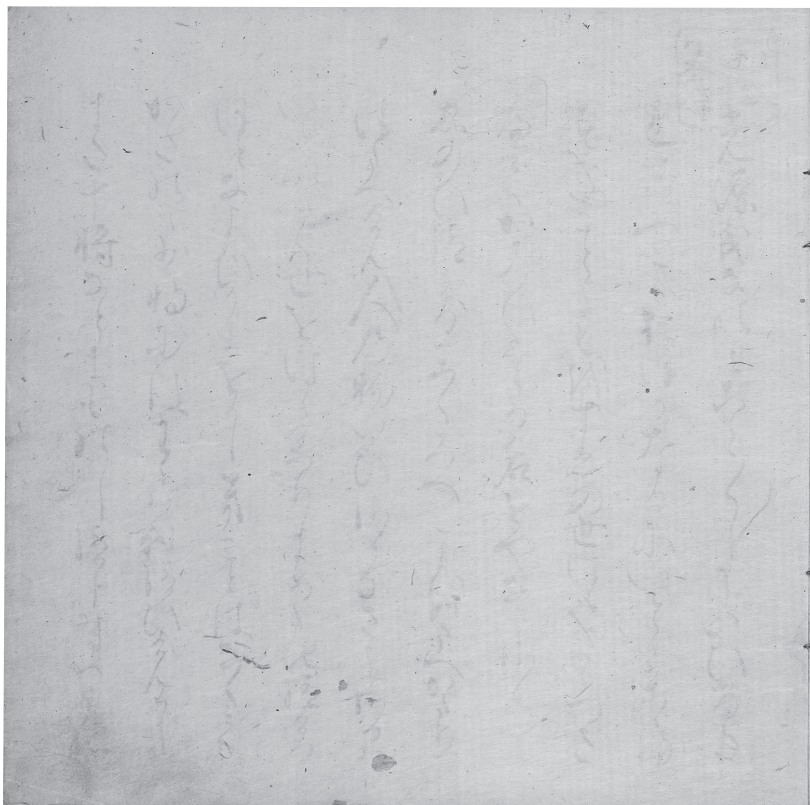
裏表紙



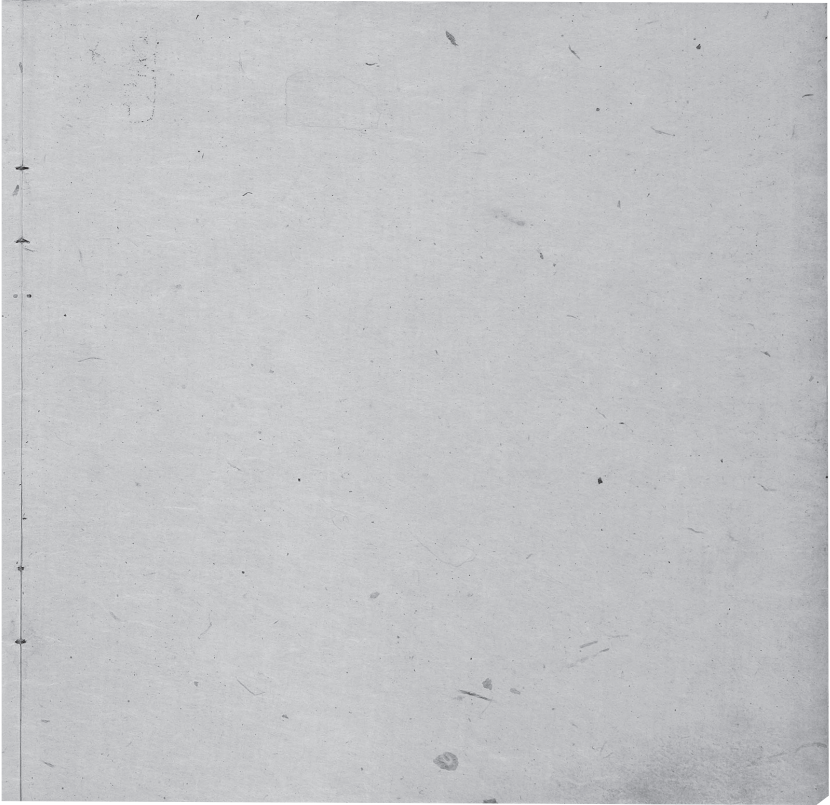
表紙



前見返



前遊紙1才



前遊紙1ウ

又存  
 元源氏まねとてくくういさ  
 世治より不ほりなりふいさ  
 ともてこもも世にまてつ  
 魚つかりいさる若もやまらんが  
 志のい治よりまろつこも  
 ばらん人々物いあらあこ  
 いさく世といさるまあ  
 ほいさくいさるまあ  
 わらわ少将あはれも  
 せん中將あはれも

1オ

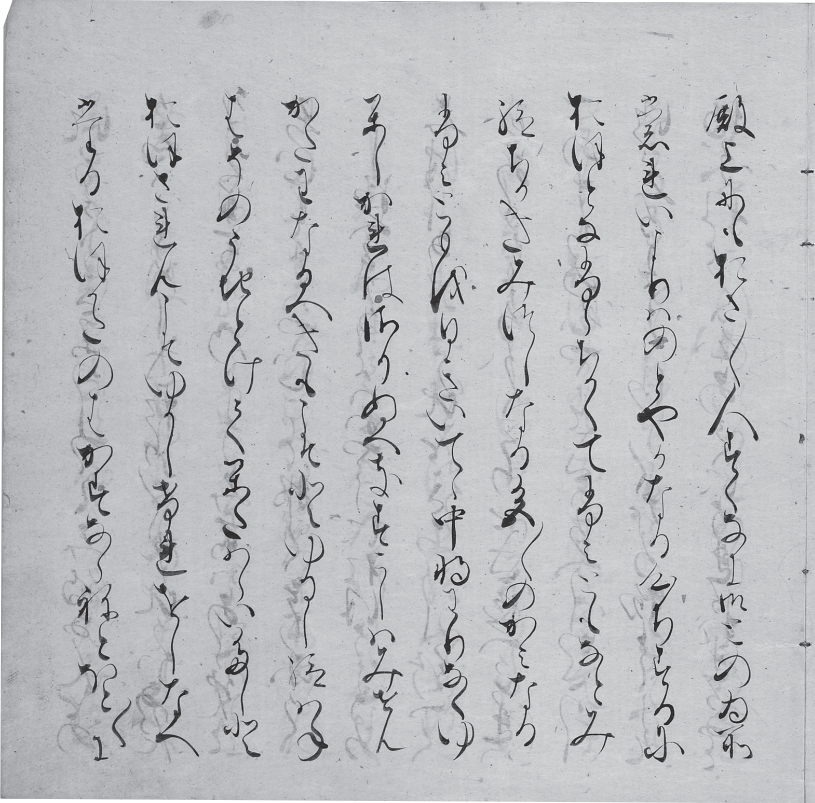
小のり...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

1ウ



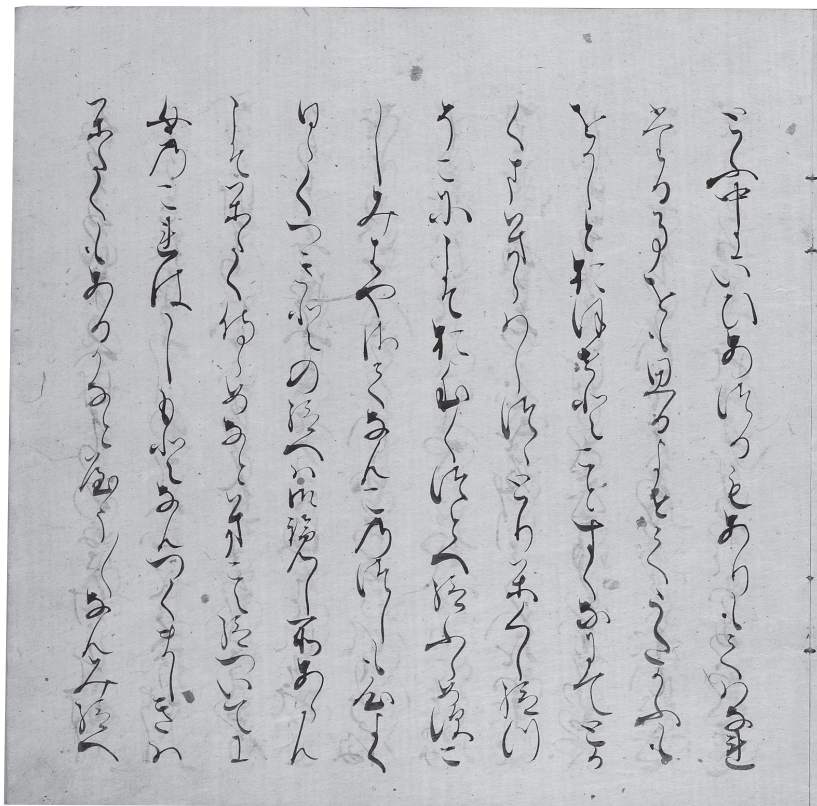
いさゝか井はゆいばとたはよのた  
にほひらあまらふりしりくちま  
しりこの世もさひなふくまもあつ  
らふらふりしりくちまはこのま  
そらちあつこの世のあまのこま  
はあまらふりしりくちまあま  
あまらふりしりくちまあま  
しりくちまあまらふりしりくち  
あまらふりしりくちまあま  
あまらふりしりくちまあま  
あまらふりしりくちまあま

かきしやあひくありはなふてんせり  
しめあつひはくしんくえん  
ら入一途は比連たて行は  
らりらりらりらりらりらり  
らりらりらりらりらりらり  
らりらりらりらりらりらり  
らりらりらりらりらりらり  
らりらりらりらりらりらり  
らりらりらりらりらりらり



殿とあはれに  
さきさきの  
なほとあはれに  
流るるも  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに

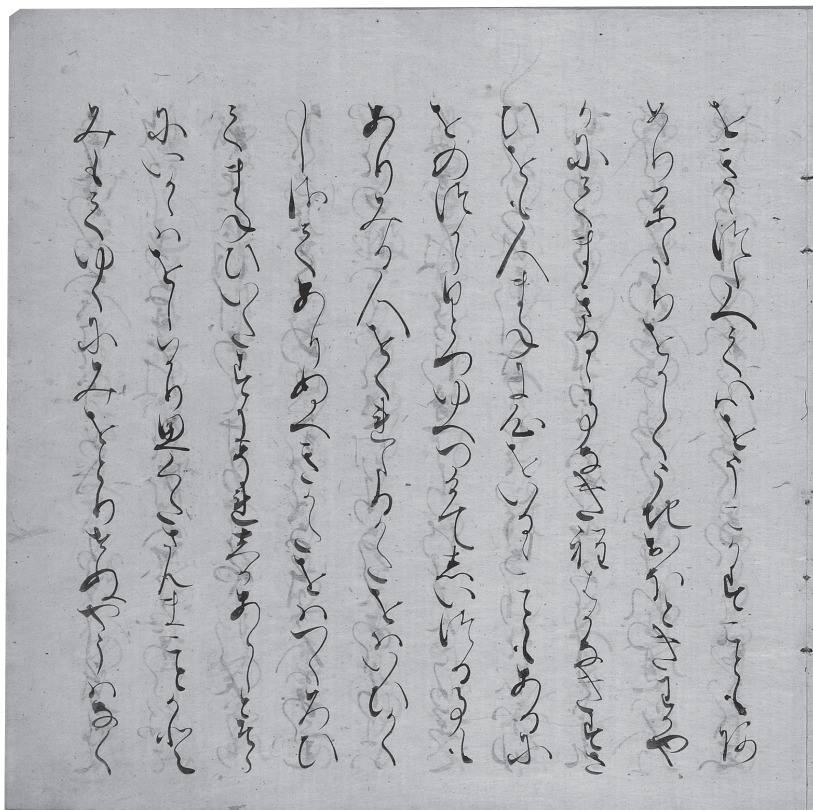
しあつらんまのりつらんふの  
りあつらんまのりつらんふの  
りあつらんまのりつらんふの  
りあつらんまのりつらんふの  
りあつらんまのりつらんふの  
りあつらんまのりつらんふの  
りあつらんまのりつらんふの  
りあつらんまのりつらんふの  
りあつらんまのりつらんふの  
りあつらんまのりつらんふの



源氏物語の写本五十二帖のうちの一枚。縦書きの草書で、右から左へ約十列の文字が記されている。紙には若干の汚れや変色が見られる。

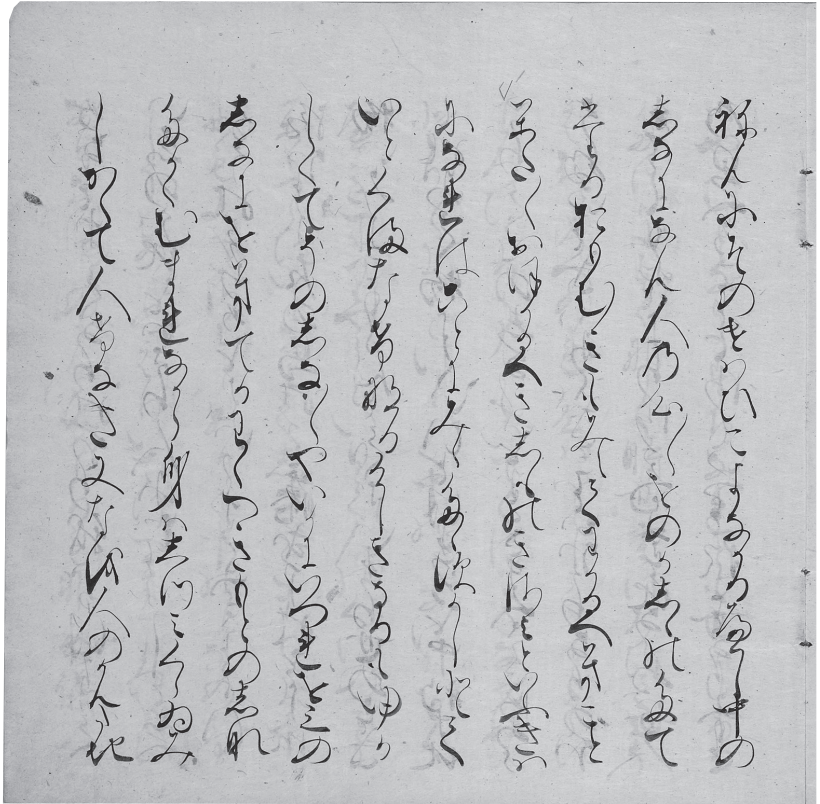
4才

あつたてのりしるしをいふに  
あつたてのりしるしをいふに  
あつたてのりしるしをいふに  
あつたてのりしるしをいふに  
あつたてのりしるしをいふに  
あつたてのりしるしをいふに  
あつたてのりしるしをいふに  
あつたてのりしるしをいふに  
あつたてのりしるしをいふに  
あつたてのりしるしをいふに









福人ふそのをいこしあつるるすの  
あまふん人のあまのあまふて  
あまふてあまふてあまふて  
あまふてあまふてあまふて  
あまふてあまふてあまふて  
あまふてあまふてあまふて  
あまふてあまふてあまふて  
あまふてあまふてあまふて  
あまふてあまふてあまふて  
あまふてあまふてあまふて

6オ

ちのいふまゝにわづらひの我らに  
いふの地よすぢりくふれ  
あふれちぢりくふれ  
流るゝたの馬はしん藤式部  
物のたしん藤式部  
る物しん藤式部  
る物しん藤式部  
る物しん藤式部  
る物しん藤式部  
る物しん藤式部

源氏物語の写本五十二帖の一場面。縦書きの草書で、十行の文字が並んでいる。右側に縦線が二本引かれている。文字は「源氏物語」の一場面を示している。

7才

四位のせめはくちわくは  
福一はくちわくはくちわくは  
福一はくちわくはくちわくは  
福一はくちわくはくちわくは  
福一はくちわくはくちわくは  
福一はくちわくはくちわくは  
福一はくちわくはくちわくは  
福一はくちわくはくちわくは  
福一はくちわくはくちわくは  
福一はくちわくはくちわくは

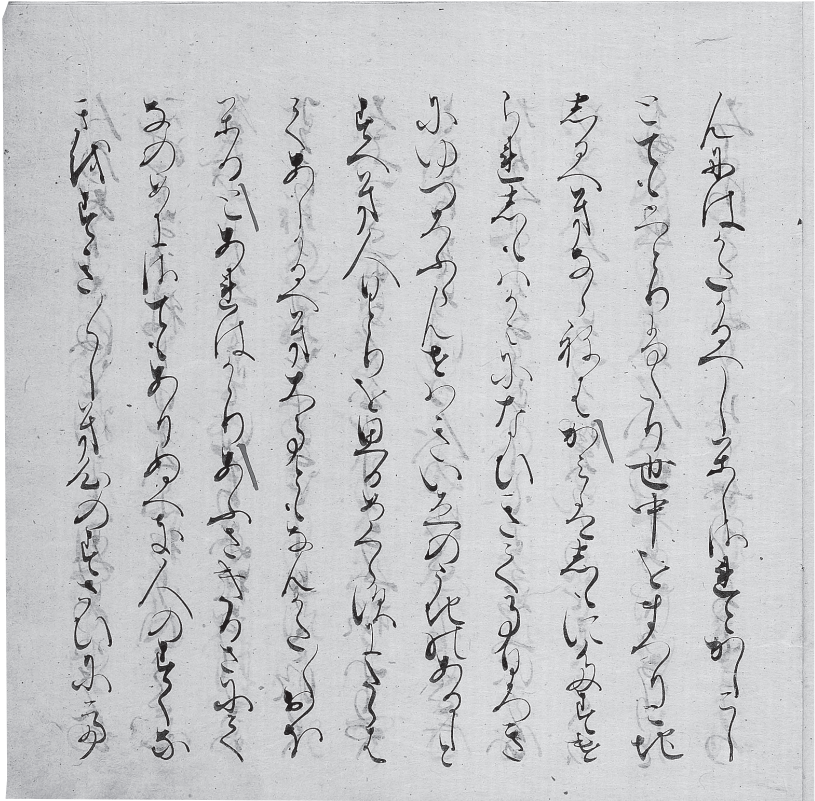
としとんぬいりやうまやとあやもは  
 と申ぬあじはりのよ時世のあやもは  
 あいふんたふふはるれらちくあそ  
 ねりちういともまきいんふあひ  
 あいもさうさうわいともんともい  
 那くねはゆりちらあひともい  
 くんともりちていりあひ  
 ねはちちつちかちちちちちち  
 ちちちちちちちちちちちちちち  
 ちちちちちちちちちちちちちち

人ふもあはれなるに  
くればかたしめり  
のちかたしめり  
くればかたしめり  
思ふもあはれなるに  
思ふもあはれなるに  
思ふもあはれなるに  
思ふもあはれなるに  
思ふもあはれなるに  
思ふもあはれなるに

The image shows a page of a handwritten Japanese manuscript. The text is written in a cursive style (sōsho) and is arranged in vertical columns, reading from right to left. There are approximately 11 columns of text. The ink is dark on a light-colored paper. The handwriting is fluid and characteristic of the Genji Monogatari manuscripts.

はるかにあけぬるをいふは  
さかきつゝあけぬるをいふは  
あけぬるをいふは  
あけぬるをいふは  
あけぬるをいふは  
あけぬるをいふは  
あけぬるをいふは  
あけぬるをいふは  
あけぬるをいふは  
あけぬるをいふは





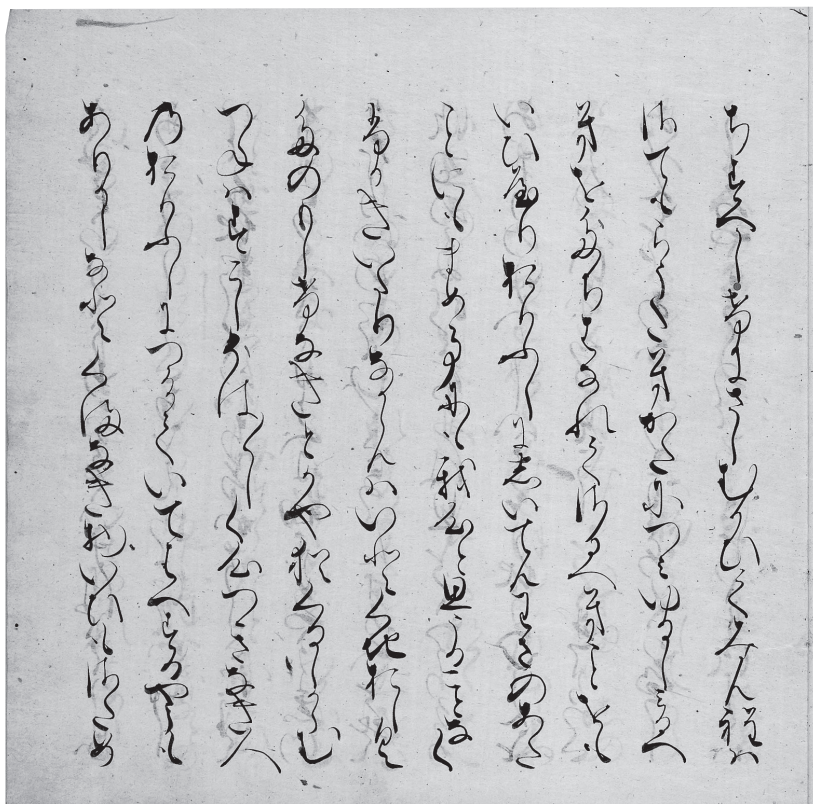
Handwritten text in a cursive script, likely a form of Japanese calligraphy (Shodō). The text is arranged in approximately 10 vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and interconnected, characteristic of cursive styles like Sōsho or Kuzushiji. The paper shows signs of age and wear, with some staining and discoloration.

いづれも...  
世のありふるとも...  
いづれも...  
あけし...  
活りん...  
たう...  
身...  
...  
...

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 10 vertical columns, reading from right to left. The characters are highly stylized and interconnected, characteristic of shorthand systems used in the late 19th or early 20th century. The paper shows signs of age, including some staining and discoloration.

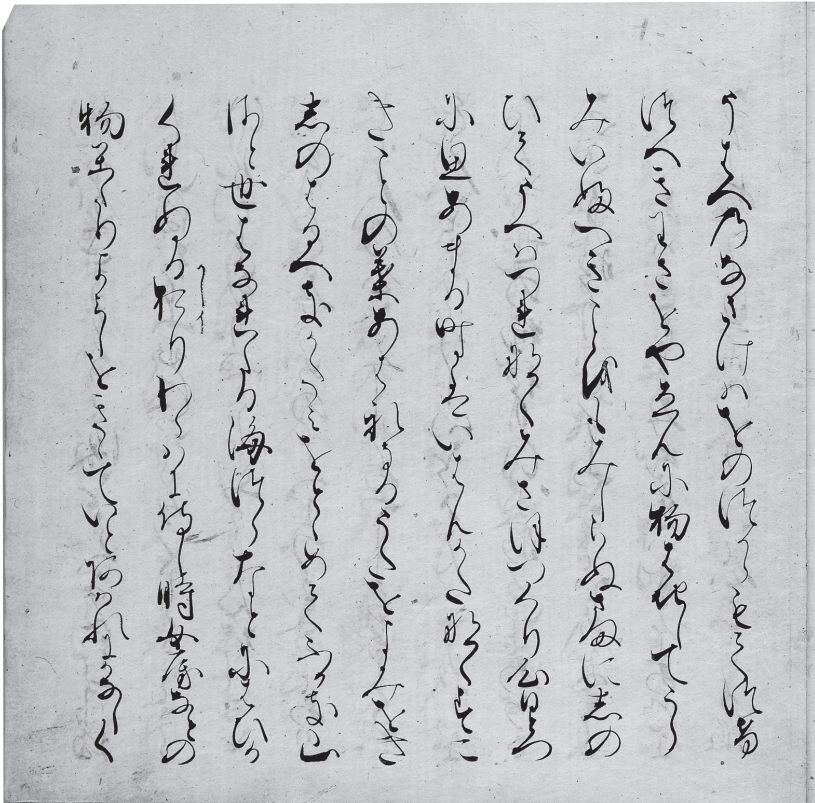


漢字の書法  
一、筆の運び  
二、墨の濃淡  
三、線の太さ  
四、字の大きさ  
五、行の並び  
六、余白の取り  
七、全体のバランス  
八、筆先の扱い  
九、墨の乾かし  
十、紙の質感

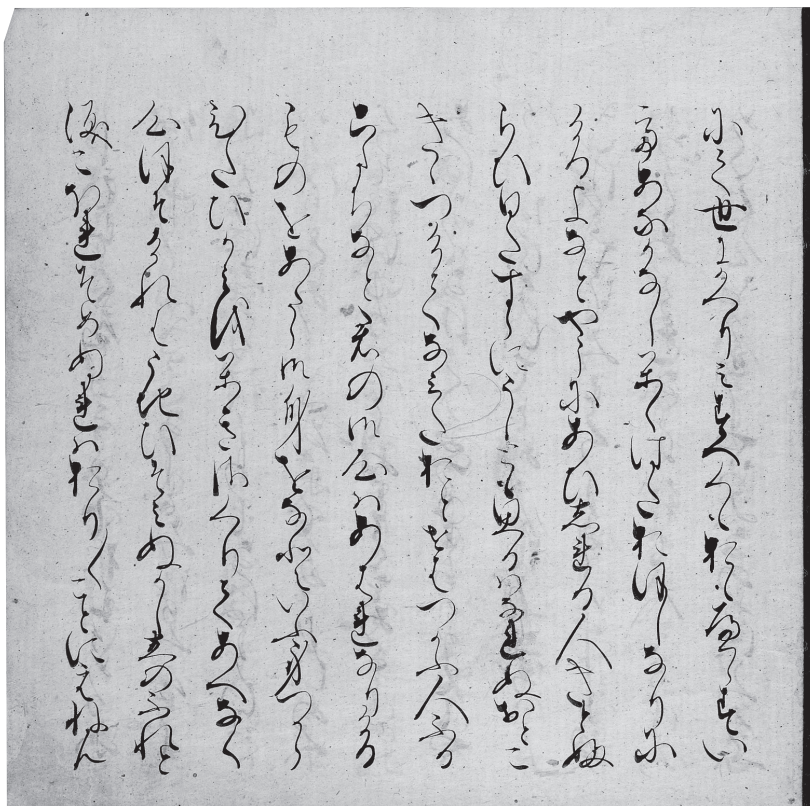


Handwritten text in a cursive script, likely Japanese calligraphy, arranged in vertical columns. The text is written on a light-colored background and appears to be a single continuous piece of writing.





公あつたしむるは海もくちをわたりて  
しむるは海もくちをわたりて  
しむるは海もくちをわたりて  
しむるは海もくちをわたりて  
しむるは海もくちをわたりて  
しむるは海もくちをわたりて  
しむるは海もくちをわたりて  
しむるは海もくちをわたりて  
しむるは海もくちをわたりて  
しむるは海もくちをわたりて



Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 12 vertical columns of characters. The text is written on aged, slightly textured paper. The characters are dark and fluid, typical of the cursive style used in traditional Japanese calligraphy. The columns are arranged from right to left, with the rightmost column starting with a long horizontal stroke that spans across the top of the page.

八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Japanese calligraphy (sōsho), consisting of approximately 10 vertical columns of characters.

うみあんとてはかきしめしむるまはるる  
あしはるるまはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるるまはるる

乃事ふる入るたはよものみちの  
まらぬわらひの物よつとまうとく  
はちりたふらふらんものなかり  
ものなれ物とあはれこもあはれ  
はなれ物とあはれこもあはれ  
あつりりりりりりりりりりり  
くくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく



十  
九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

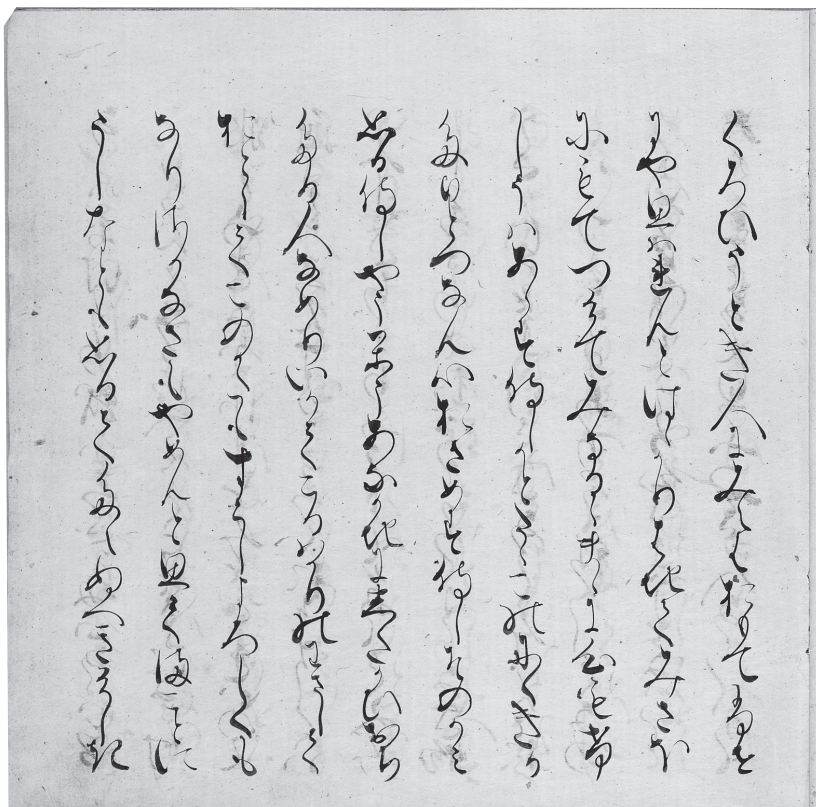
Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in approximately 10 vertical columns. The text is written in black ink on a light-colored, aged paper background. The script is highly stylized and fluid, characteristic of historical Islamic calligraphy. The columns are roughly parallel and fill most of the page's width.

ひてふあつていふはなをよみしにうらなふ  
あききとちうらなふらみふあつていふ  
くさつていふあつていふあつていふ  
とふあつていふあつていふあつていふ  
あつていふあつていふあつていふ  
あつていふあつていふあつていふ  
あつていふあつていふあつていふ  
あつていふあつていふあつていふ  
あつていふあつていふあつていふ  
あつていふあつていふあつていふ

の事かきとくつくはんとて地  
まわかしきしきつはちうつ中  
ふかきあけつてつてはくせ  
らんせうせうせうせうせう  
らんせうせうせうせうせう  
らんせうせうせうせうせう  
らんせうせうせうせうせう  
らんせうせうせうせうせう  
らんせうせうせうせうせう  
らんせうせうせうせうせう

わさ行のそきちりよふこの人と  
こまりあひまはるちなるはあはれ  
ねひあひつらうんくさうんくさうん  
まゆいと物まういとあひまゆいと  
うらふふふふふふふふふふふふ  
あまうらうんくさうんくさうんくさうん  
あまうらうんくさうんくさうんくさうん  
あまうらうんくさうんくさうんくさうん  
あまうらうんくさうんくさうんくさうん  
あまうらうんくさうんくさうんくさうん

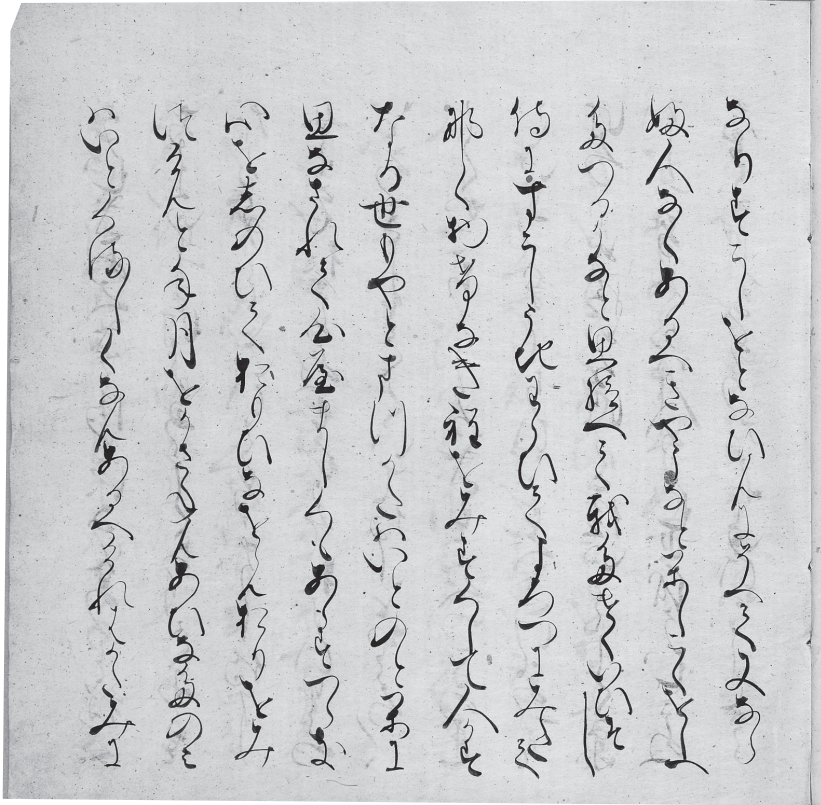
ついでにそのついでに  
ゆりうりこもあつたのうた  
かたしつゝもたつた  
しらの公もたつた  
あつたつゝもたつた  
ついでにそのついでに  
ついでにそのついでに  
ついでにそのついでに  
ついでにそのついでに  
ついでにそのついでに



くろいりともきんふたはたてあを  
もやとまきんふたはたてあを  
ふとてつとてみうつちよふとあ  
しつとてつとてみうつちよふとあ  
あつとてつとてみうつちよふとあ  
あつとてつとてみうつちよふとあ  
あつとてつとてみうつちよふとあ  
あつとてつとてみうつちよふとあ  
あつとてつとてみうつちよふとあ  
あつとてつとてみうつちよふとあ

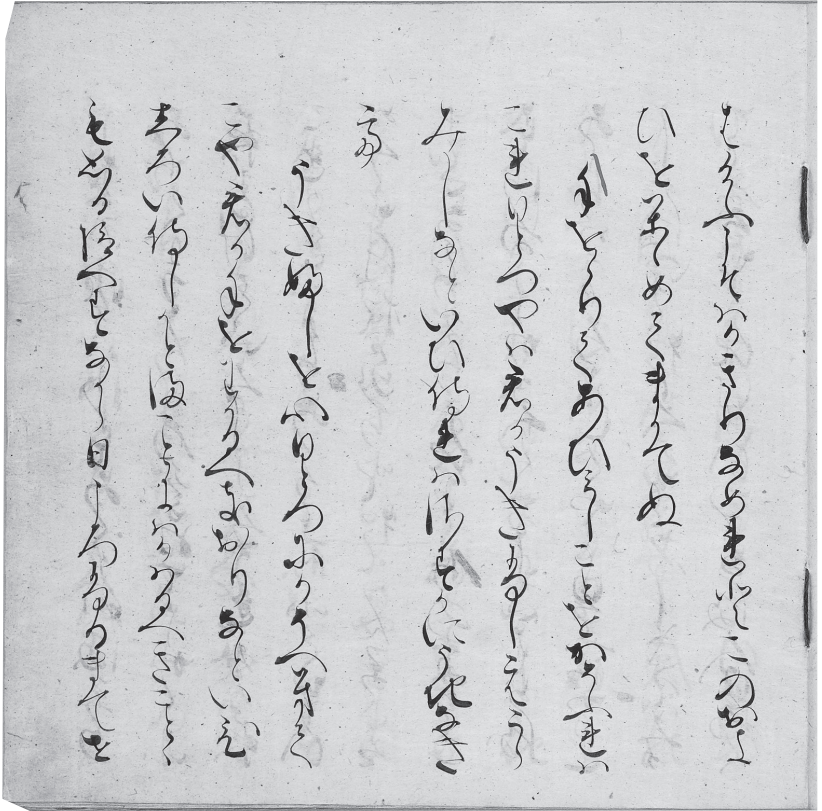
Handwritten text in a cursive script, likely a form of Japanese calligraphy (Shodō). The text is arranged in approximately 10 vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and interconnected, characteristic of cursive styles like Sōsho or Kuzushiji. The paper shows signs of age, including some staining and a slightly uneven texture.





Handwritten text in vertical columns, likely a page from a Japanese manuscript. The text is written in a cursive style (sōsho) and is arranged in approximately 12 columns from right to left. The characters are dark ink on a light background.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in approximately 10 vertical columns. The script is dense and fluid, with varying line lengths and some decorative flourishes. The text is written on a light-colored, slightly textured paper.



うきをばかしのをりくればあり  
ありくはるるのふれてくわく小  
来もけそいふくうきあり来  
こせうきまうりありくふそい  
わくまはたふらわたりんそい  
まゝありありふそいありあり  
まはるるのくもまゝありあり  
ありありありありありありあり  
しはるるのくもまゝありあり  
しはるるのくもまゝありあり

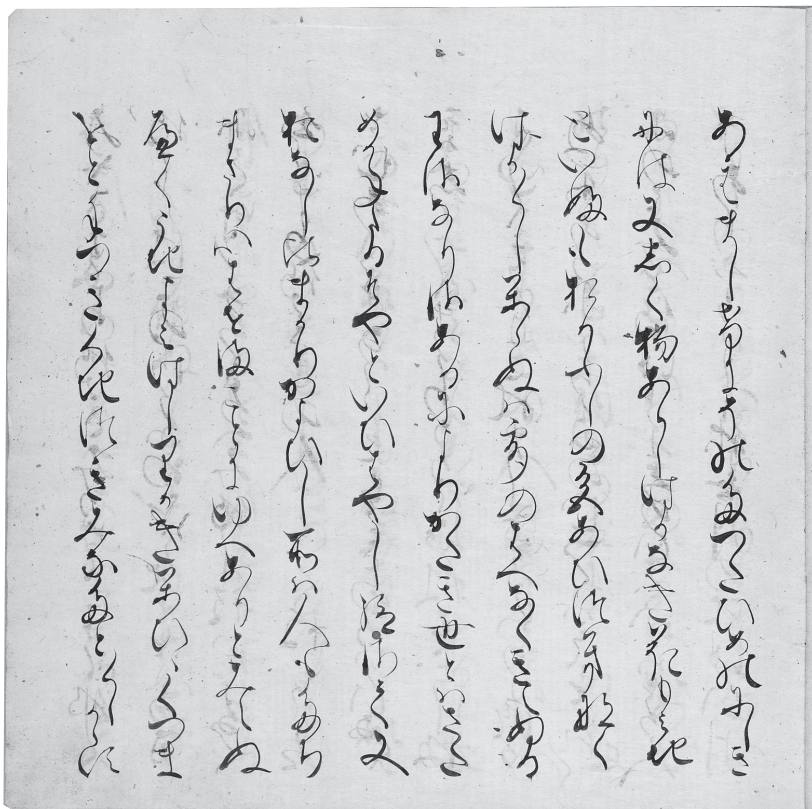
ほろろとわたりてはるるにまはるるに  
うらむる者もまはるるにまはるるに  
かたむくもまはるるにまはるるに  
かたむくもまはるるにまはるるに  
かたむくもまはるるにまはるるに  
かたむくもまはるるにまはるるに  
かたむくもまはるるにまはるるに  
かたむくもまはるるにまはるるに  
かたむくもまはるるにまはるるに  
かたむくもまはるるにまはるるに



あはれなる御心も  
あはれなる御心も  
あはれなる御心も  
あはれなる御心も  
あはれなる御心も  
あはれなる御心も  
あはれなる御心も  
あはれなる御心も  
あはれなる御心も  
あはれなる御心も

くはちあしはあはれおんあはれ  
ははれあしはあはれおんあはれ  
ははれあしはあはれおんあはれ  
ははれあしはあはれおんあはれ  
ははれあしはあはれおんあはれ  
ははれあしはあはれおんあはれ  
ははれあしはあはれおんあはれ  
ははれあしはあはれおんあはれ  
ははれあしはあはれおんあはれ  
ははれあしはあはれおんあはれ





あはれもいふはなれぬしんはれはな  
かは又志く物あらはまはれたるは  
とてぬいれりやのまぢりはなれ  
はなれぬしんはなれぬしんはなれ  
はなれぬしんはなれぬしんはなれ  
はなれぬしんはなれぬしんはなれ  
はなれぬしんはなれぬしんはなれ  
はなれぬしんはなれぬしんはなれ  
はなれぬしんはなれぬしんはなれ  
はなれぬしんはなれぬしんはなれ

みきこもりちりかきりてんが  
ゆるほのあらしあぢとせとせりか  
みくしんもりかみくしんが  
みくしんもりかみくしんが  
みくしんもりかみくしんが  
みくしんもりかみくしんが  
みくしんもりかみくしんが  
みくしんもりかみくしんが  
みくしんもりかみくしんが  
みくしんもりかみくしんが

たゞちちりし来りちりちりちりちり  
あつらんきさあひいこのちりぬいあを  
ぬりちりぬい大納言の家よちりぬい  
らむとちりよこの人ぬいぬいぬい  
ちりぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬい  
この女ぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬい  
あまぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬい  
月をぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬい  
ぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬい  
ぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬい

そらあきとらにちうきららのをれきた  
じやうまりのあくとら月とあ  
あつとたのちくくわちいもちも  
さあつとたのなまあつとたをい  
みらあつとらあつとらあつとら  
てあつとらあつとらあつとら  
あつとらあつとらあつとらあつとら  
あつとらあつとらあつとらあつとら  
あつとらあつとらあつとらあつとら  
あつとらあつとらあつとらあつとら

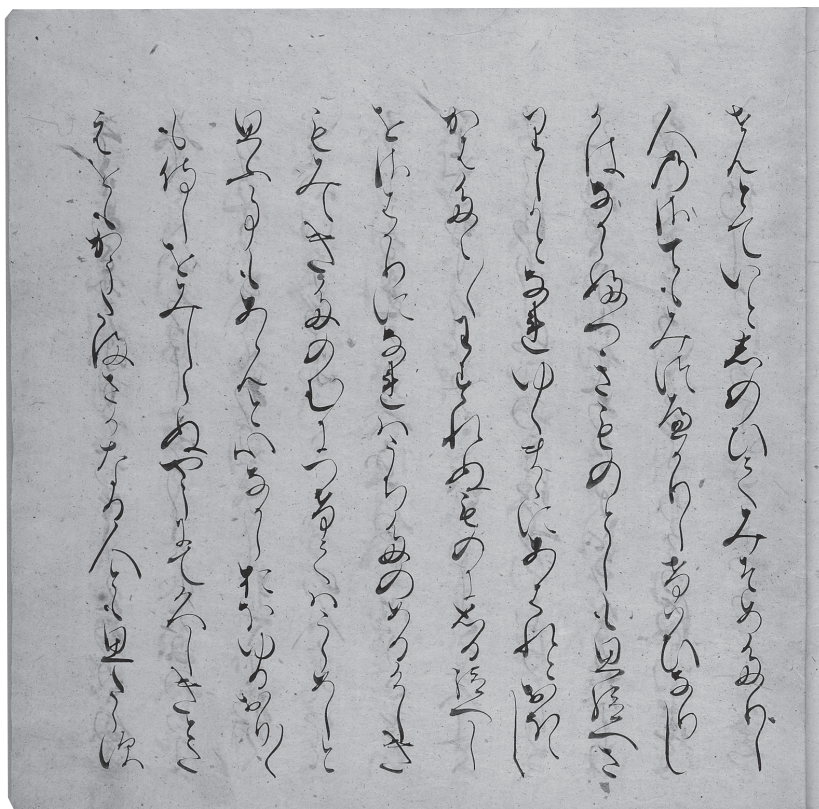
Handwritten text in cursive style (sōsho), likely a page from the Genji Monogatari manuscript. The text is arranged in ten vertical columns, reading from right to left.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in approximately 10 horizontal lines. The script is dense and fluid, with varying line lengths and some decorative flourishes. The text is written on a light-colored, slightly textured paper.



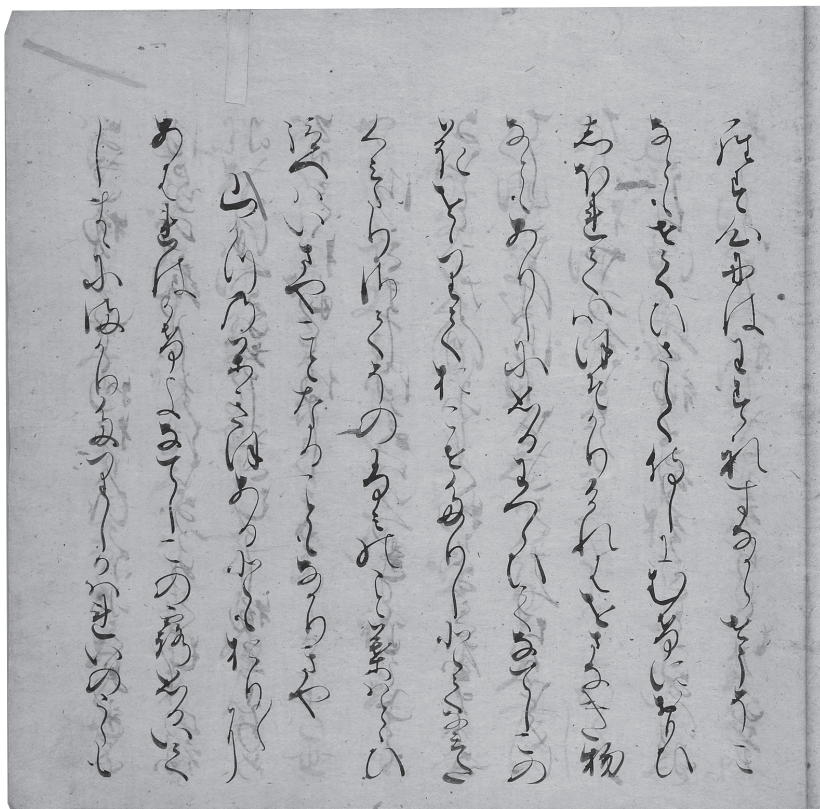






源氏物語(写本五十二帖)の写本の一頁。右から十行の文字が記されている。文字は流麗な草書体で書かれており、墨の濃淡や筆の運びが特徴的である。

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in approximately 10 vertical columns. The text is written in dark ink on a light-colored, aged paper background. The script is highly stylized and fluid, characteristic of historical Islamic calligraphy. The columns are roughly parallel and fill most of the page's width.



Handwritten text in vertical columns, likely a page from a Japanese manuscript. The text is written in a cursive style (sōsho) and is arranged in approximately 10 columns from right to left. The characters are dark ink on a light-colored paper background.





何れにせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ  
物小志の一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ  
一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ  
一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ  
一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ  
一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ  
一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ  
一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ  
一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ  
一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ一にせよ

あまのつゆは けふもあまのつゆは  
けふもあまのつゆは けふもあまのつゆは  
けふもあまのつゆは けふもあまのつゆは  
けふもあまのつゆは けふもあまのつゆは  
けふもあまのつゆは けふもあまのつゆは  
けふもあまのつゆは けふもあまのつゆは  
けふもあまのつゆは けふもあまのつゆは  
けふもあまのつゆは けふもあまのつゆは  
けふもあまのつゆは けふもあまのつゆは  
けふもあまのつゆは けふもあまのつゆは

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 12 vertical columns of characters.



この世にありては  
人の心はまじりて  
あはれなるはまじり  
あはれなるはまじり  
あはれなるはまじり  
あはれなるはまじり  
あはれなるはまじり  
あはれなるはまじり  
あはれなるはまじり  
あはれなるはまじり

わが身をたもたむは  
わが身をたもたむは  
わが身をたもたむは  
わが身をたもたむは  
わが身をたもたむは  
わが身をたもたむは  
わが身をたもたむは  
わが身をたもたむは  
わが身をたもたむは  
わが身をたもたむは

きよきこみおのむらさきいぬ物うたせと  
もじりくくひまうりゆいとのつ  
えまうりあしてうれれとゆりうてん  
はつたちうりうとまうりあはるる  
あひゆりうりうまうりあはるる  
福とあつりうりうりうりうりうりう  
きよのりうりうりうりうりうりう  
みんりうりうりうりうりうりう  
あつちのりうりうりうりうりう  
うりうりうりうりうりうりう

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 10 vertical columns of characters.

又  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns from right to left. The text is written on a light-colored, aged paper with some faint bleed-through from the reverse side. The characters are fluid and connected, typical of the cursive hand used in traditional Japanese calligraphy.

The image shows a page from a handwritten manuscript, likely a copy of the Genji Monogatari. The text is written in a cursive style (sōsho) and is arranged in ten vertical columns, reading from right to left. The ink is dark on a light-colored paper. The characters are fluid and connected, characteristic of the cursive style. The page is numbered 37 at the bottom.

くたしゝめんちらやに物いなり  
あきらまるのひつきのひつきのひ  
らしんぶふふふふふふふふ  
んんんんんんんんんんんん  
んんんんんんんんんんんん  
んんんんんんんんんんんん  
んんんんんんんんんんんん  
んんんんんんんんんんんん  
んんんんんんんんんんんん  
んんんんんんんんんんんん  
んんんんんんんんんんんん  
んんんんんんんんんんんん



あはれもはつらつとてはのちもはなれ  
しはなれぬとてはつらつとてはなれぬ  
人のあはれもはつらつとてはなれぬ  
あはれもはつらつとてはなれぬ  
あはれもはつらつとてはなれぬ  
あはれもはつらつとてはなれぬ  
あはれもはつらつとてはなれぬ  
あはれもはつらつとてはなれぬ  
あはれもはつらつとてはなれぬ  
あはれもはつらつとてはなれぬ

Handwritten text in a vertical column, likely a page from a Japanese manuscript. The characters are in a cursive style (sōsho). The text is arranged in a single column, reading from right to left. The ink is dark and the paper appears aged and slightly textured. The characters are densely packed and flow together in a continuous line.

あまのこゝろに  
かよひしきよきよ  
はなはたはなはた  
はなはたはなはた  
はなはたはなはた  
はなはたはなはた  
はなはたはなはた  
はなはたはなはた  
はなはたはなはた  
はなはたはなはた

たもみ物—みまい—ろろろろろろろろろろ  
きききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき

るあまをたはむ物もあまらりたりき  
あまのあまのこけりてけりききき  
去れりけりてけりてけりて中納言  
中納言やまもてけりてけりて  
あまのあまのけりてけりて  
あまのあまのけりてけりて  
あまのあまのけりてけりて  
あまのあまのけりてけりて  
あまのあまのけりてけりて

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 12 vertical columns of characters.

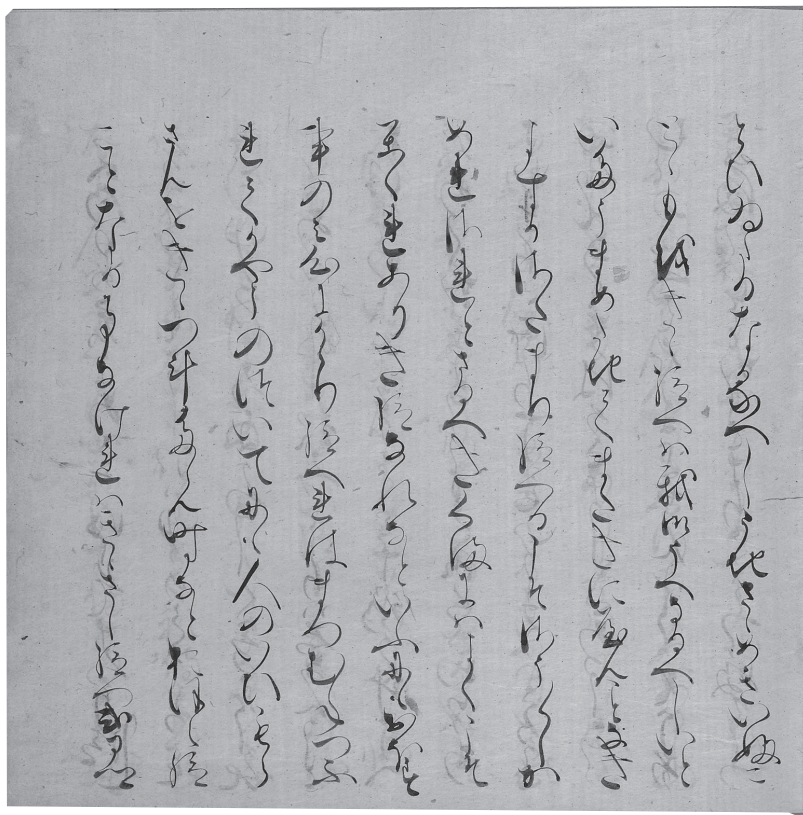
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは

昔平の福の物にえりふらりは元  
 とそく々の本丁のうらりはねのまに  
 りりきねましあしはく人けりらと  
 金らひ志のしるはらりしるはら  
 可とらりきとてはらりしるはら  
 活らりしるはらりしるはらりしる  
 ねらりしるはらりしるはらりしる  
 入らりしるはらりしるはらりしる  
 せらりしるはらりしるはらりしる  
 公らりしるはらりしるはらりしる



72  
あはれなる御心は  
さかたに御心は  
さかたに御心は  
さかたに御心は  
さかたに御心は  
さかたに御心は  
さかたに御心は  
さかたに御心は  
さかたに御心は  
さかたに御心は

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 15 vertical columns of characters.



又りしあまのあはれをよみしは  
うらたしとてうらたしとてうらたし  
かこゆらりゆらりゆらりゆらり  
あはれりゆらりゆらりゆらり  
たはれりゆらりゆらりゆらり  
あはれりゆらりゆらりゆらり  
あはれりゆらりゆらりゆらり  
あはれりゆらりゆらりゆらり  
あはれりゆらりゆらりゆらり  
あはれりゆらりゆらりゆらり

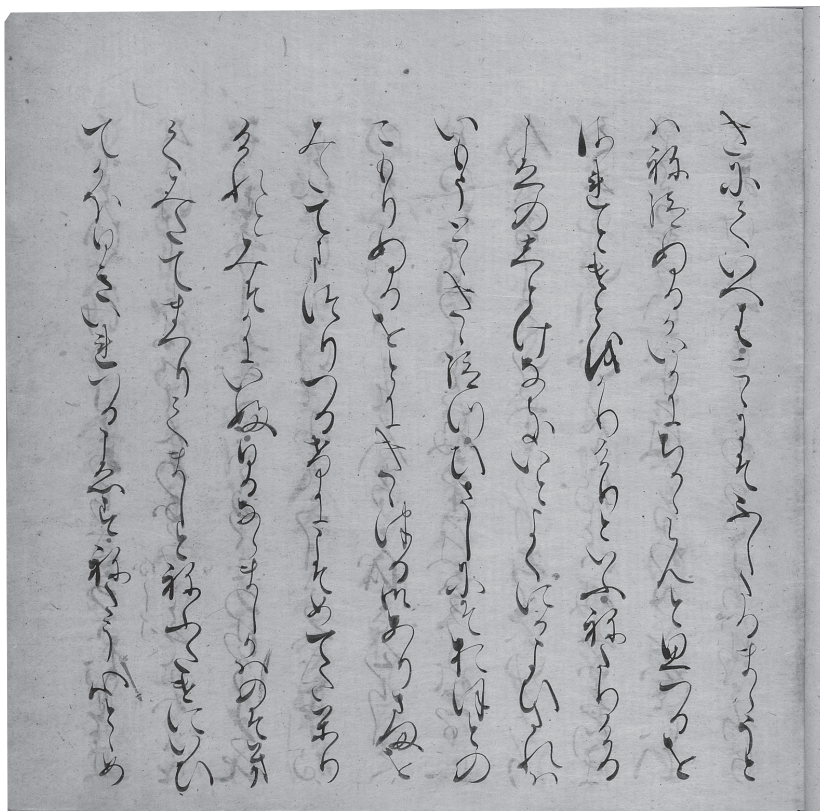
あまのたぢふらちりあつとく  
とのかしきし人かまのちりあつとく  
子にさしあつとくあつとく  
のほつとくあつとくあつとく  
あつとくあつとくあつとく  
あつとくあつとくあつとく  
あつとくあつとくあつとく  
あつとくあつとくあつとく  
あつとくあつとくあつとく  
あつとくあつとくあつとく  
あつとくあつとくあつとく

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

物にあらばしるすも  
あはれなきもあはれなきも  
あはれなきもあはれなきも  
あはれなきもあはれなきも  
あはれなきもあはれなきも  
あはれなきもあはれなきも  
あはれなきもあはれなきも  
あはれなきもあはれなきも  
あはれなきもあはれなきも  
あはれなきもあはれなきも

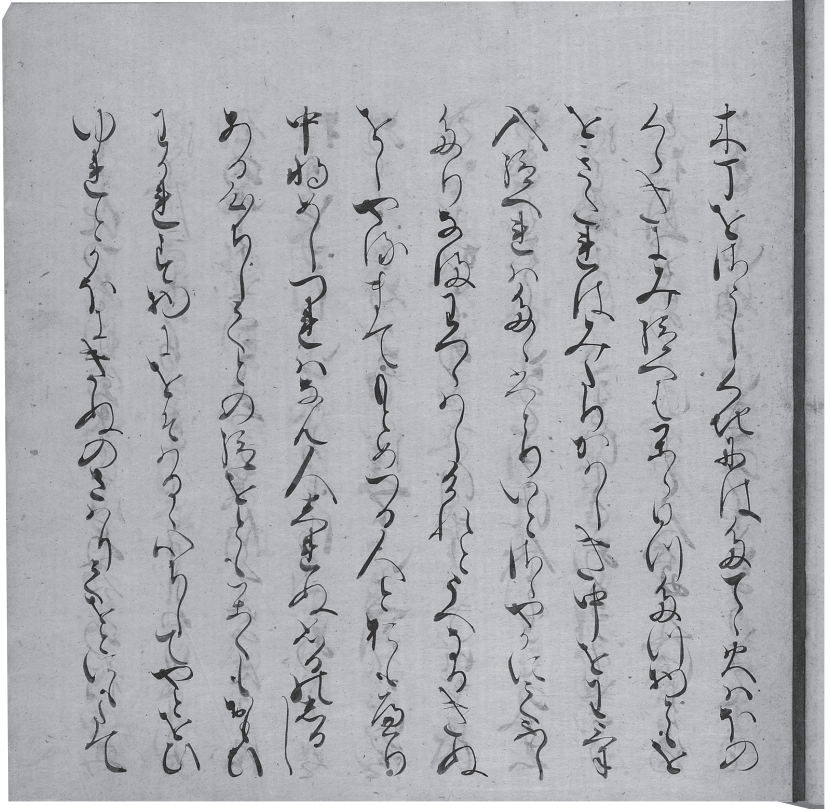
世に女を志すを止れり一徳ありとてや  
まかりたりあはんとまにこひをいふは  
なふ人へのものこゝろもつきのまゝありぬ  
まゝいけても移りまじらむとていふは  
とまらぬまゝにいひぬめぬのまゝのまゝの  
あまの一人のまゝいふかゝるまゝのまゝ  
いぬ人へのまゝいふかゝるまゝのまゝ  
に公のまゝのまゝいふかゝるまゝのまゝ  
ありけりまゝのまゝいふかゝるまゝのまゝ  
くまゝのまゝいふかゝるまゝのまゝ





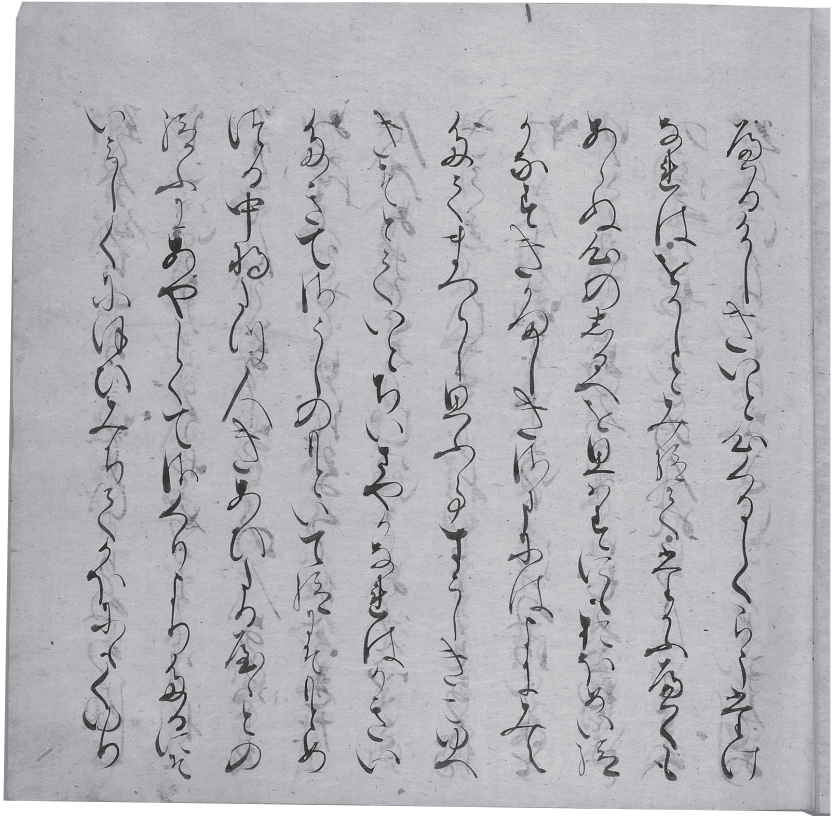
Handwritten text in vertical columns, likely from a Japanese manuscript. The text is written in a cursive style (sōsho) and is arranged in approximately 10 columns, reading from right to left. The characters are dark and fluid, typical of traditional Japanese calligraphy.

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 10 vertical columns of characters.

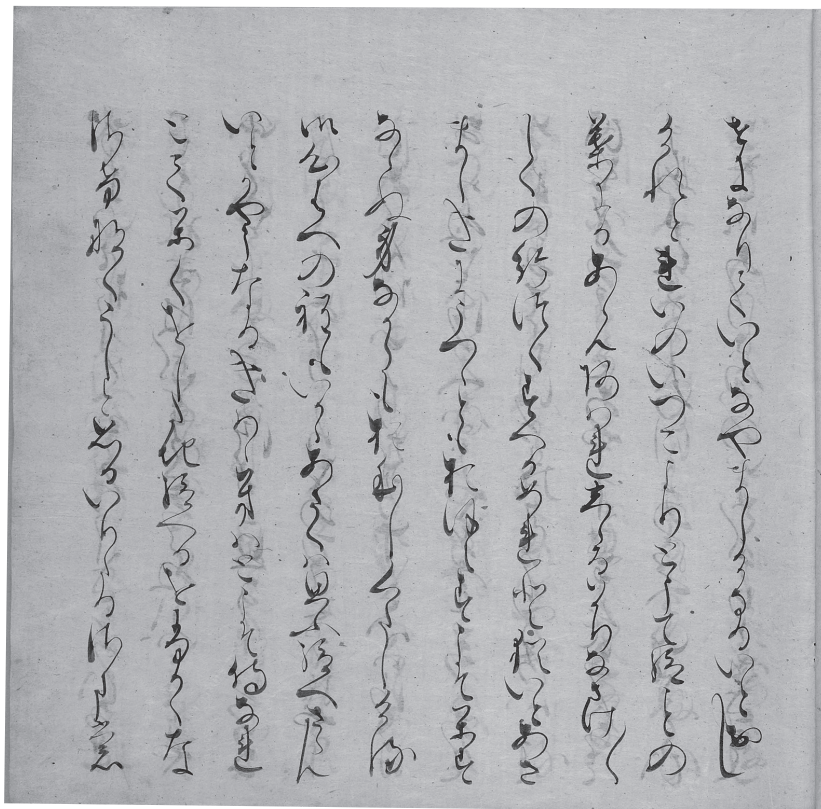


本丁とありし一紙也其の文は  
くさしと云ふはしりしは  
よきと云ふはしりしは  
よきと云ふはしりしは  
よきと云ふはしりしは  
よきと云ふはしりしは  
よきと云ふはしりしは  
よきと云ふはしりしは  
よきと云ふはしりしは  
よきと云ふはしりしは

とて此のちあるは公の程に  
はるかにあつたはるかに  
公の中にもあつたはるかに  
わつたはるかにあつたはるかに  
あつたはるかにあつたはるかに  
あつたはるかにあつたはるかに  
あつたはるかにあつたはるかに  
あつたはるかにあつたはるかに



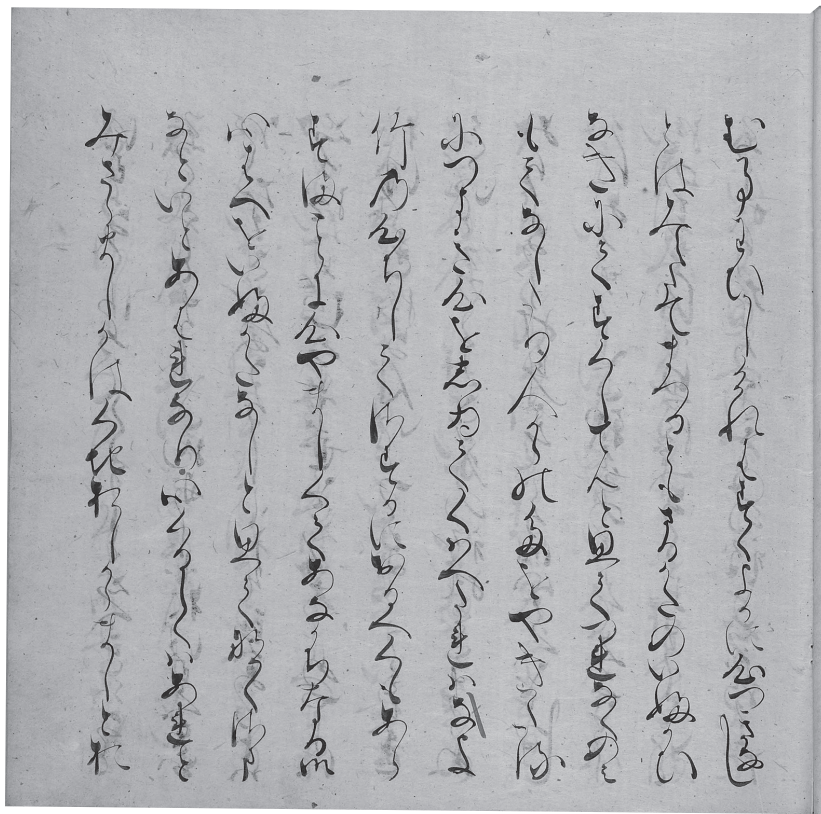
五方からやあまのいりあはぬ  
たのいりあまのいりあまのいり  
あまのいりあまのいりあまのいり  
あまのいりあまのいりあまのいり  
あまのいりあまのいりあまのいり  
あまのいりあまのいりあまのいり  
あまのいりあまのいりあまのいり  
あまのいりあまのいりあまのいり  
あまのいりあまのいりあまのいり  
あまのいりあまのいりあまのいり



とておのれをいふはまじきことなり  
まはらむはまじきことなり  
まはらむはまじきことなり  
まはらむはまじきことなり  
まはらむはまじきことなり  
まはらむはまじきことなり  
まはらむはまじきことなり  
まはらむはまじきことなり  
まはらむはまじきことなり  
まはらむはまじきことなり



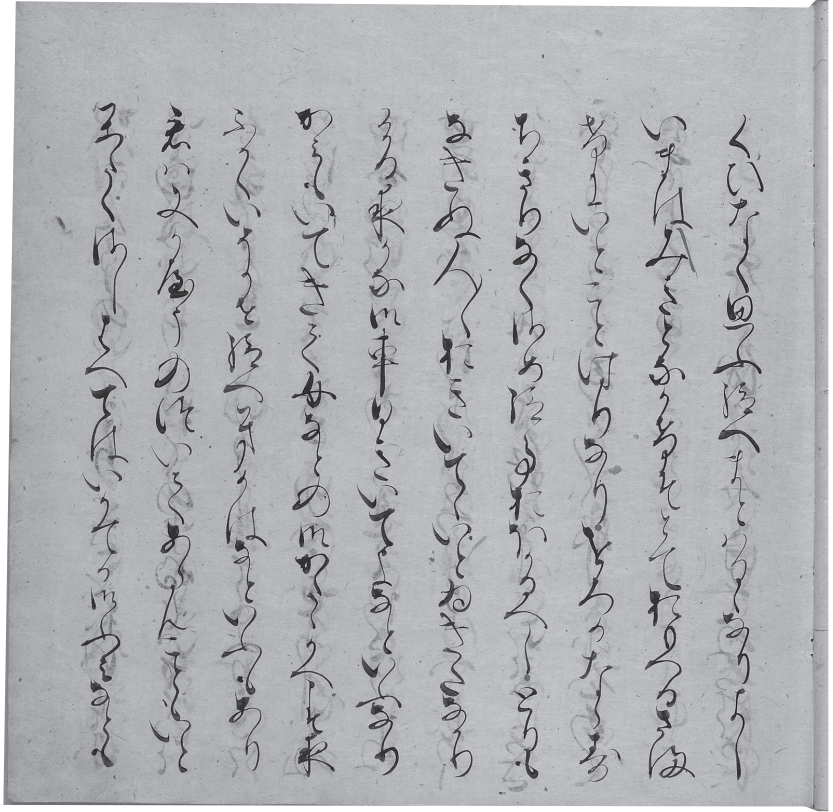




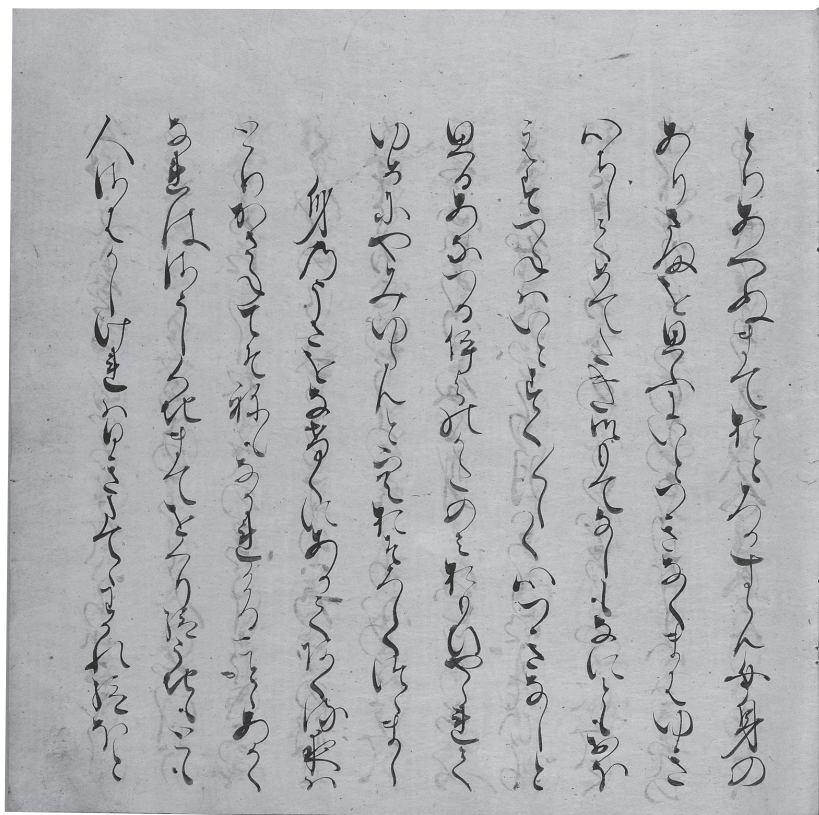
Handwritten text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns from right to left. The text is a transcription of a passage from the Genji Monogatari (Genji Tale).

今もあはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は

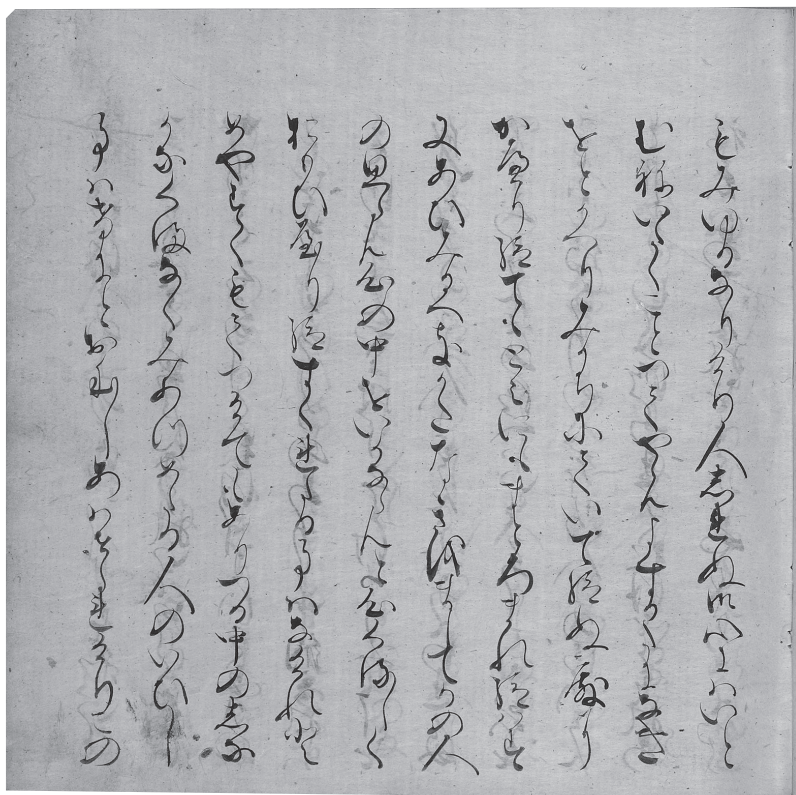






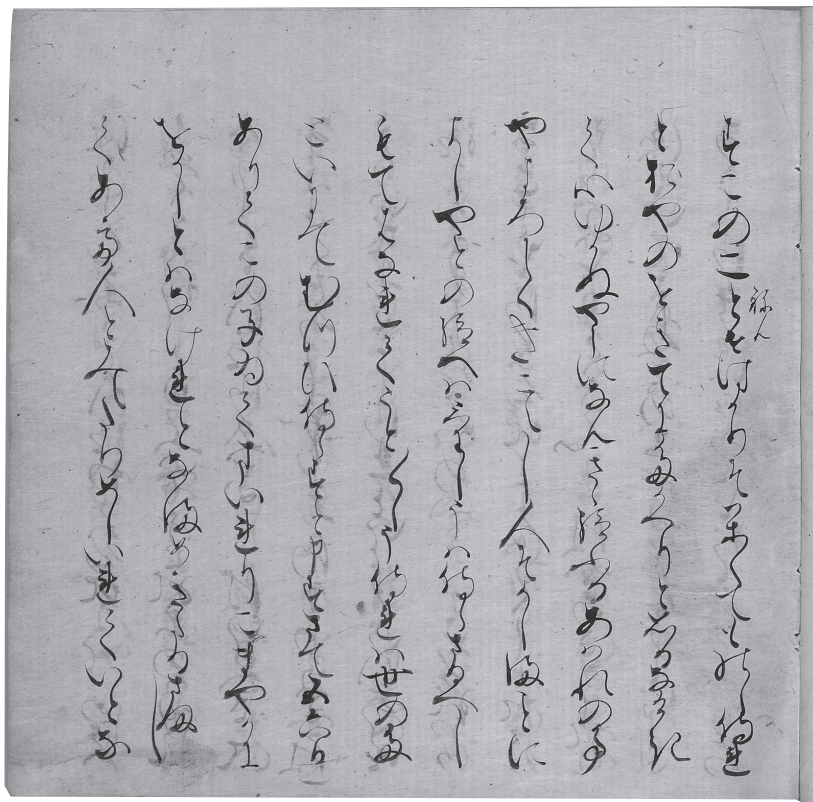


公の御心を御承り申すは御心  
の御心を御承り申すは御心  
の御心を御承り申すは御心  
の御心を御承り申すは御心  
の御心を御承り申すは御心  
の御心を御承り申すは御心  
の御心を御承り申すは御心  
の御心を御承り申すは御心  
の御心を御承り申すは御心  
の御心を御承り申すは御心

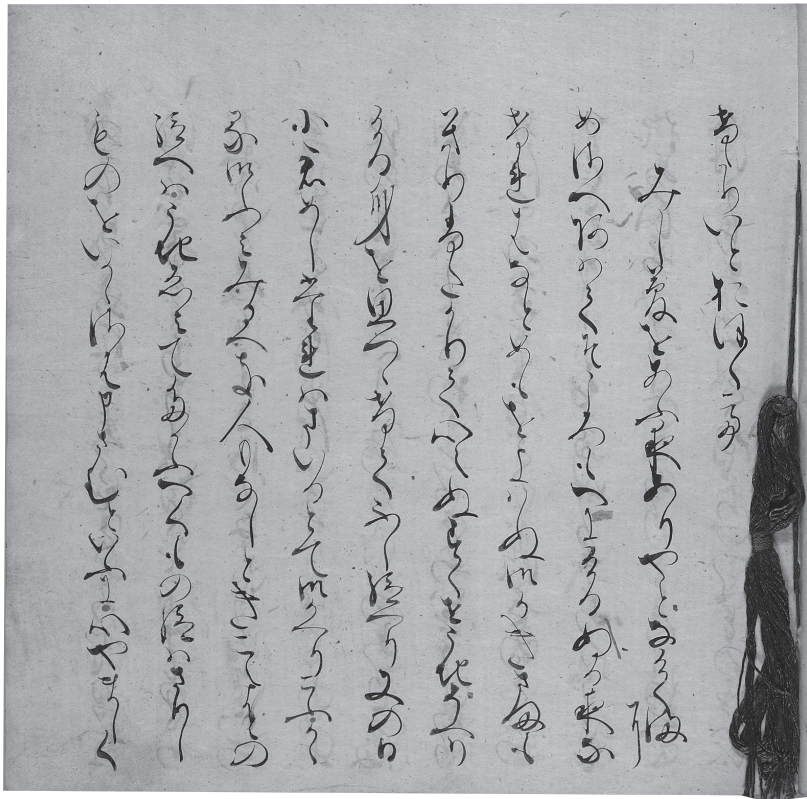


わが心はまことのありてはなす  
てはなす心はまことのありてはなす  
わが心はまことのありてはなす  
てはなす心はまことのありてはなす  
わが心はまことのありてはなす  
てはなす心はまことのありてはなす  
わが心はまことのありてはなす  
てはなす心はまことのありてはなす  
わが心はまことのありてはなす  
てはなす心はまことのありてはなす  
わが心はまことのありてはなす  
てはなす心はまことのありてはなす





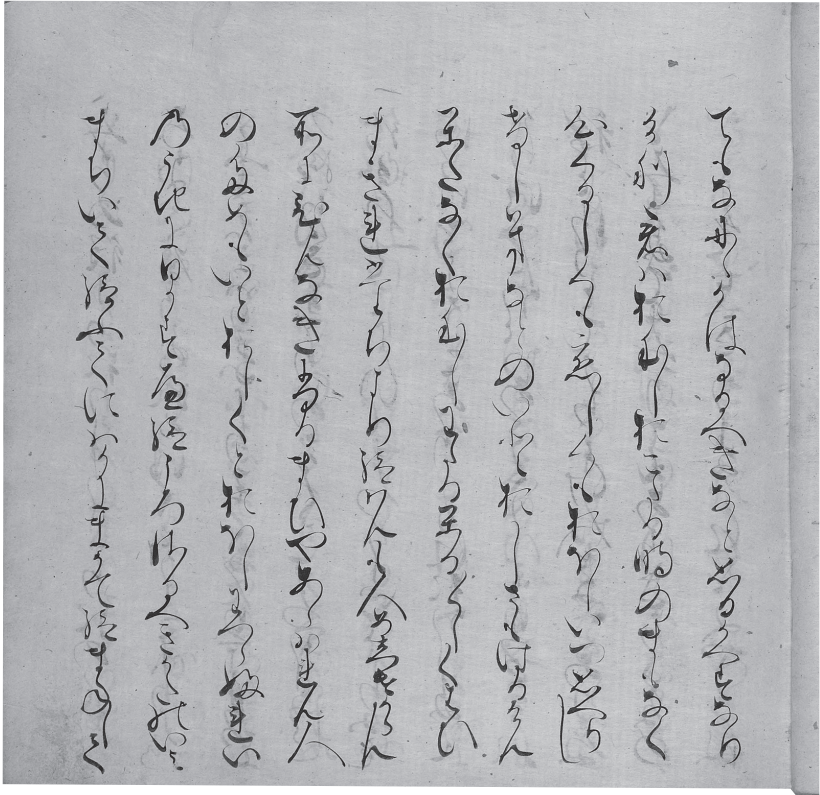
はらへくきくひはわつをばらへんりや  
あひくきくひはわつをばらへんりや  
くきくひはわつをばらへんりや  
くきくひはわつをばらへんりや  
くきくひはわつをばらへんりや  
くきくひはわつをばらへんりや  
くきくひはわつをばらへんりや  
くきくひはわつをばらへんりや  
くきくひはわつをばらへんりや  
くきくひはわつをばらへんりや



Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, arranged in ten vertical columns. The text is written in black ink on a light-colored, textured paper. The script is highly stylized and fluid, characteristic of the 'Nasta'liq' style. The columns are arranged from right to left, with the rightmost column being the first line of text and the leftmost column being the tenth line. The text appears to be a continuous passage, possibly a religious or philosophical treatise, given the context of such manuscripts. The ink is dark and consistent throughout, and the paper shows some signs of age and wear, particularly along the edges and in the spaces between the columns.

あつてはしりぬりていふわあつて  
たつてはしりぬりていふわあつて  
のりていふわあつていふわあつて  
りていふわあつていふわあつて  
りていふわあつていふわあつて  
りていふわあつていふわあつて  
りていふわあつていふわあつて  
りていふわあつていふわあつて  
りていふわあつていふわあつて  
りていふわあつていふわあつて

しくあふふのたをたのむるにま  
 せ給ふといはれりてはなかりて  
 ありありはなれりてはなかりて  
 ありありはなれりてはなかりて  
 ありありはなれりてはなかりて  
 ありありはなれりてはなかりて  
 ありありはなれりてはなかりて  
 ありありはなれりてはなかりて  
 ありありはなれりてはなかりて  
 ありありはなれりてはなかりて



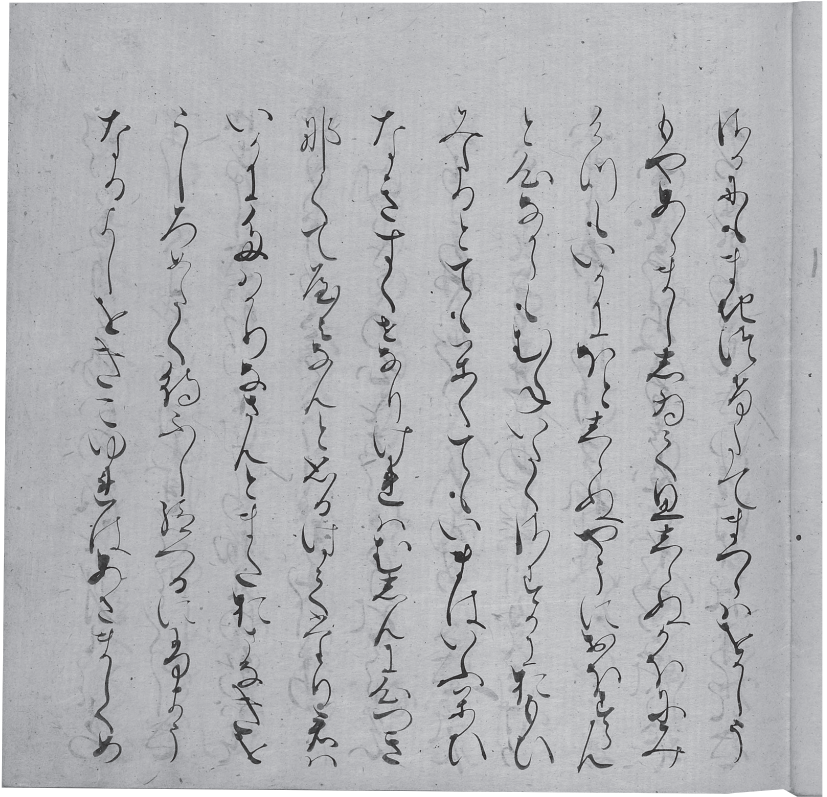
しるはせりはふりてあはれなるはあり  
多かれはたしはたしはあはれなるはあり  
公のしるはせりはふりてあはれなるはあり  
あはれなるはありはたしはあはれなるはあり  
あはれなるはありはたしはあはれなるはあり  
あはれなるはありはたしはあはれなるはあり  
あはれなるはありはたしはあはれなるはあり  
あはれなるはありはたしはあはれなるはあり  
あはれなるはありはたしはあはれなるはあり  
あはれなるはありはたしはあはれなるはあり

みちのほしりたりしつらりたのめく  
あなまゝなりみれあしんこりこり  
こりこりこりこりこりこりこり  
のほりこりこりこりこりこり  
つれもこりこりこりこりこり  
はらみせこりこりこりこり  
はらみせこりこりこりこり  
はらみせこりこりこりこり  
はらみせこりこりこりこり  
はらみせこりこりこりこり  
はらみせこりこりこりこり

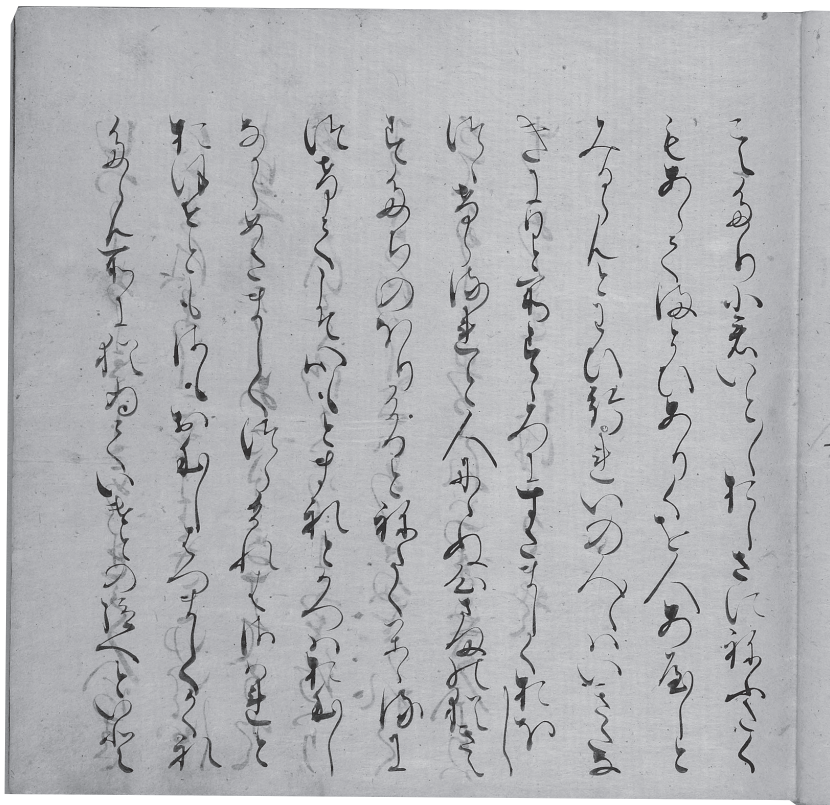


魚人といふは、  
いふは、  
いふは、  
いふは、  
いふは、  
いふは、  
いふは、  
いふは、  
いふは、  
いふは、

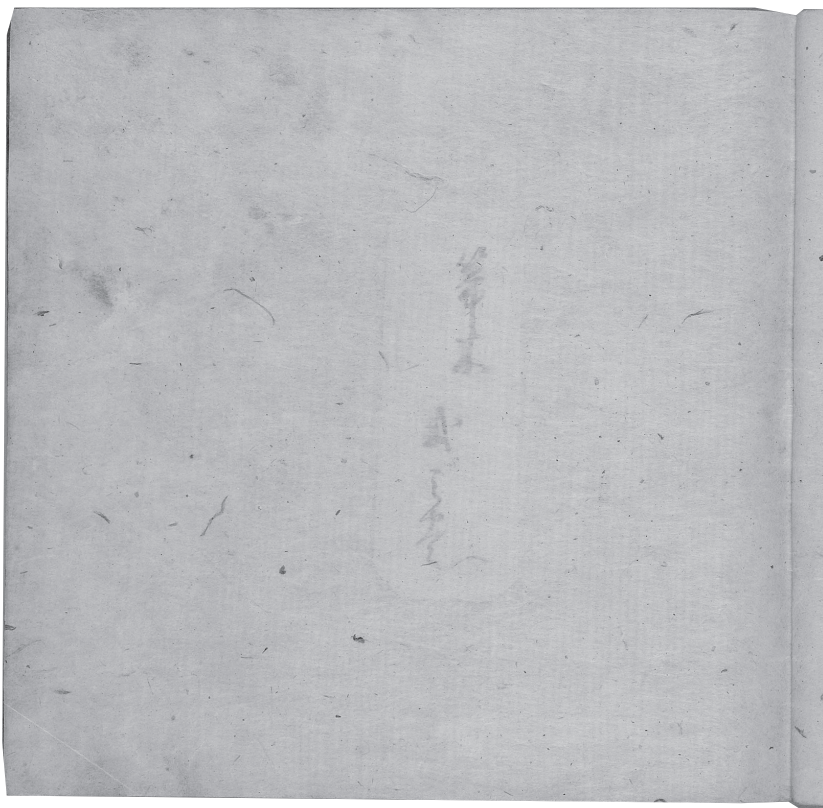
あはれいしくもいふはるるの  
さうらひのほろりたるはるの  
おもひはるるはるるの  
おもひはるるはるるの  
おもひはるるはるるの  
おもひはるるはるるの  
おもひはるるはるるの  
おもひはるるはるるの



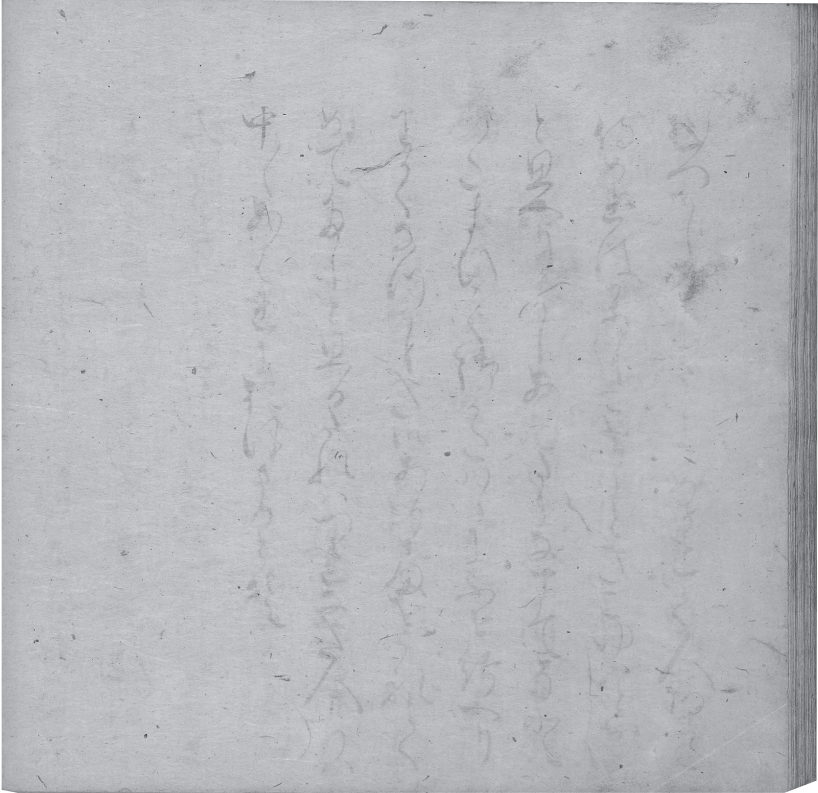
Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in approximately 10 vertical columns. The text is written in black ink on a light-colored, aged paper. The script is highly stylized and fluid, characteristic of the Maghrebi or Maghrebi-influenced styles. The columns are roughly parallel to each other, with some variations in line length and spacing. The overall appearance is that of a manuscript page, possibly a page from a book or a collection of poems or prose.



Handwritten text in Arabic script, likely a religious or historical document, written in a cursive style. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines across the page. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.

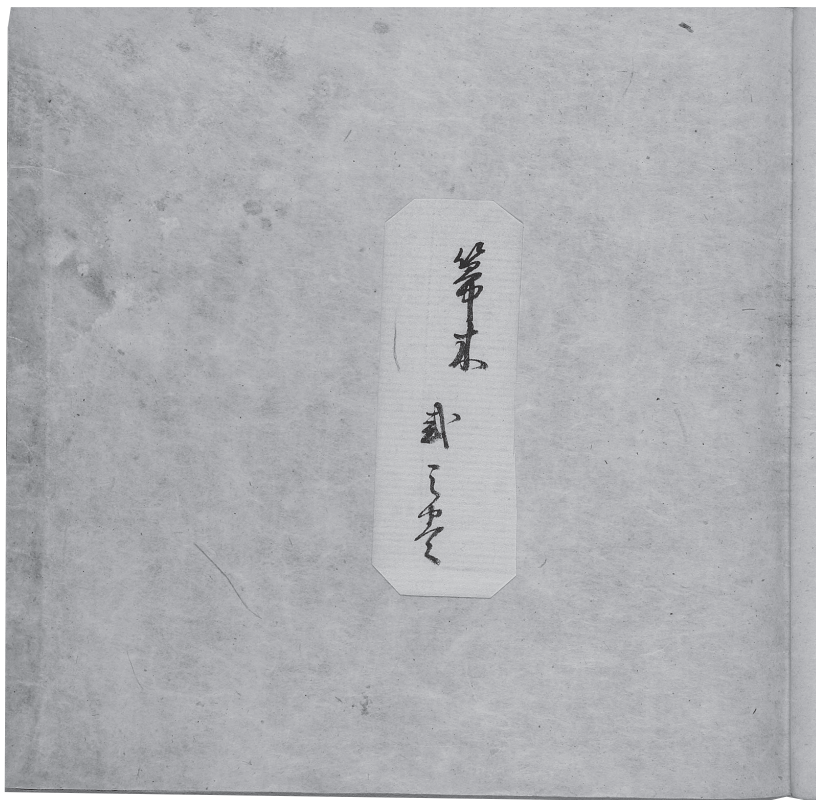


後遊紙1才

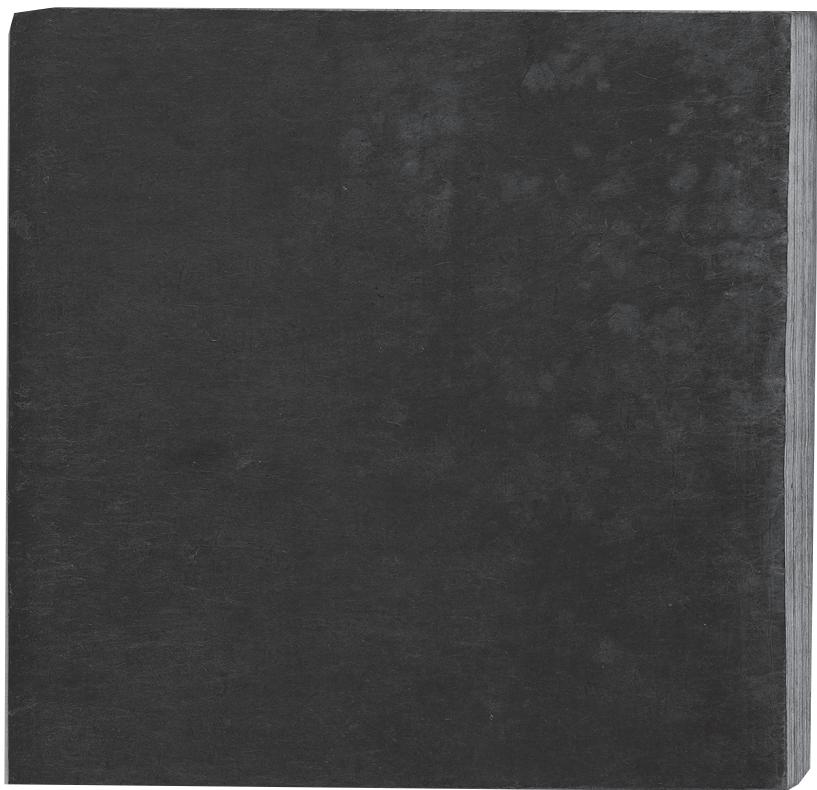


後遊紙1ウ





後見返



裏表紙